

鹿児島県総合教育センター
平成 22 年度長期研修報告書

研究主題

音や音楽を知覚し，感受する力を高める
音楽科学習指導の在り方

—「創作」と「鑑賞」の活動を
有機的・効果的に関連付けた題材における指導を通して—

鹿屋市立花岡中学校
教諭 坂本 多恵

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題の基本的な考え方	
(1)	「音や音楽を知覚し、感受する」とは	2
(2)	表現と鑑賞の「有機的・効果的な関連」とは	3
(3)	音や音楽を知覚し、感受する力を高める「創作」と「鑑賞」の 有機的・効果的な関連とは	4
2	生徒の実態調査の分析と考察	
(1)	内容と方法	4
(2)	分析と考察	5
3	音や音楽を知覚し、感受する力を高める音楽科学習指導の構想	
(1)	「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の開発〔視点1〕	6
(2)	音の意識化を図る指導法の工夫〔視点2〕	9
(3)	イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫〔視点3〕	10
4	検証授業Ⅰ（知覚を学習の柱とした題材）の実際と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	12
(2)	検証授業Ⅰの実際と考察	12
(3)	検証授業Ⅰ後の生徒の感想	17
(4)	検証授業Ⅰの成果と課題	17
5	検証授業Ⅱに向けて	
(1)	「フラワーマップ」 ：音楽の知覚と感受のかかわりを認知して感じ取らせる手だて〔視点2〕	17
(2)	「音楽鑑賞のすすめ」 ：音楽に関する知識と語彙力を高めさせる手だて〔視点3〕	18
6	検証授業Ⅱ（感受を学習の柱とした題材）の実際と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	19
(2)	検証授業Ⅱの実際と考察	19
(3)	検証授業Ⅱ後の生徒の感想	24
(4)	検証授業Ⅱの成果と課題	24
7	生徒の変容の分析と考察	24
IV	研究のまとめ	
1	今後の指導に向けて	26
2	研究の成果	27
3	今後の課題	28

I 研究主題設定の理由

音楽科教育は、音楽を通して、価値あるものに気付く柔らかな感性をはぐくみ、生活を明るく豊かにしていこうとする心情を育てるものであり、豊かな心の育成につながるものである。今回の学習指導要領改訂では、感性を働かせ、思考・判断し表現する活動が重視され、表現及び鑑賞の各活動の支えとなるものとして、「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること」が新たに示されるなど、音や音楽を知覚し、感受する力をより一層高めていく指導が求められている。

本校の生徒は、日ごろから「歌唱」や「器楽」などの表現の技能を高めようと意欲的に授業に参加している。しかし、思いや意図をもって表現しようとする意識は低く、音楽を表層的にとらえがちで、音楽の諸要素を聴き取り、音楽の構造をとらえるといった聴取の深まりが足りない。よって、感性を働かせ、音楽に込められた作曲者や演奏者の思いや意図を感じ取ったり、音楽の構造やイメージなどを生かして表現を工夫したりするまでに至っていない。これまでも、聴取を深めるために授業展開や発問の工夫などを行ってきた。しかし、音楽は、様々な要素が総合的かつ複雑にかかわり合いながら成り立っているため、一つ一つの要素を知覚することは容易でない。生徒の聴取が深まらない原因は、音楽全体を漠然ととらえ、音楽の諸要素を意識して聴き取ることができていないためではないかと考えられる。

音や音楽を知覚し、感受する力は、すべての音楽活動の基盤となるものであり、この能力を高めることは、音楽を深く味わい、思いや意図をもって表現しようとする生徒の育成につながる。また、この能力は、「歌唱」、「器楽」、「創作」、「鑑賞」の活動を通して培われるものであり、四つの活動を関連させて指導することで、更に高めることができると考える。

そこで、本研究では、四つの活動の中でも特に、音そのものを意識しやすい「創作」と音を意識することが求められる「鑑賞」の相互関連を図ろうと考えた。「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材において、音の意識化を図る指導法の工夫や、イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫を行い、感性を働かせ、音や音楽を感じ取らせる活動を繰り返すといった指導を通して、音や音楽を知覚し、感受する力を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

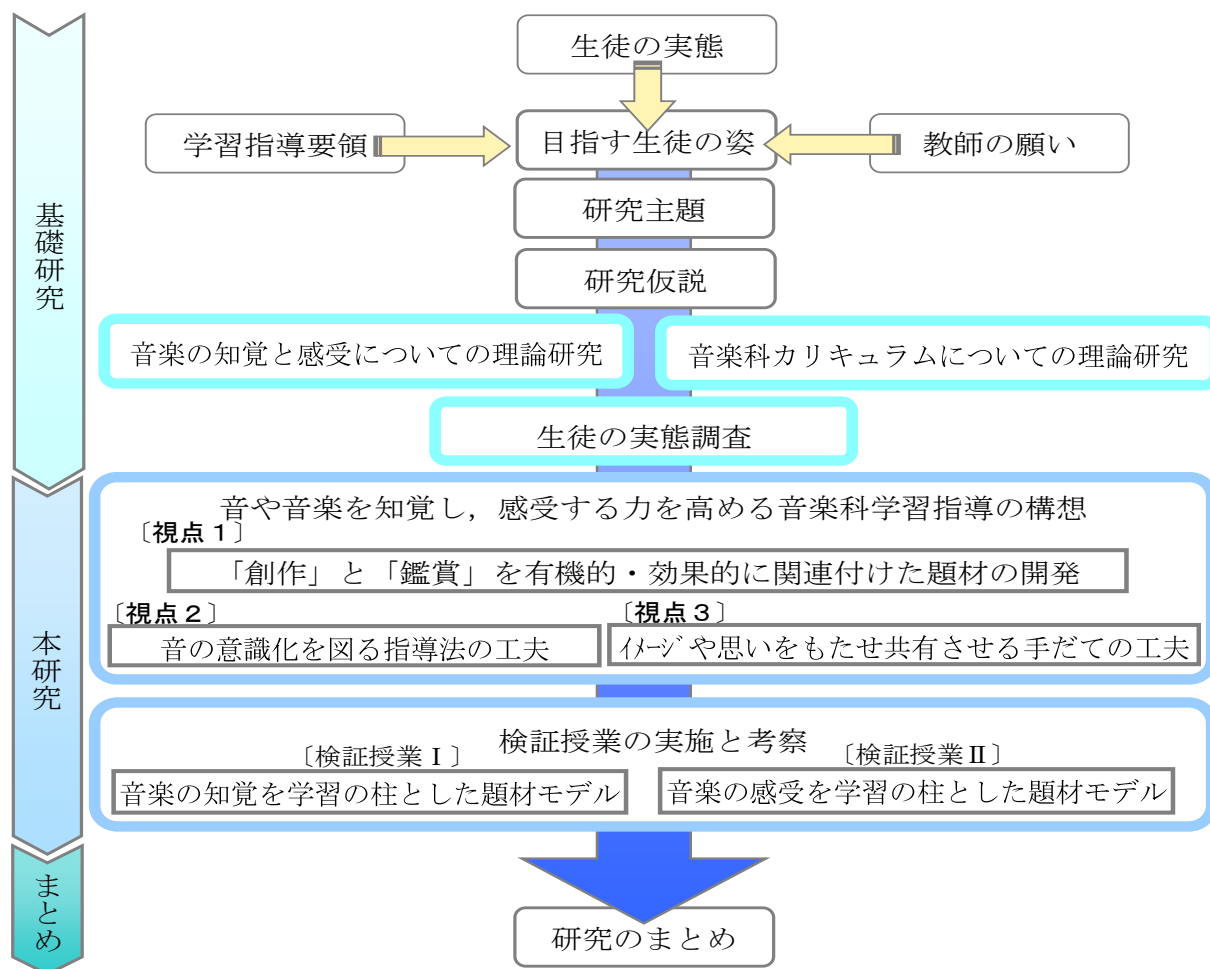
1 研究のねらい

- (1) 学習指導要領や先行研究・文献等を基に、音楽の聴取について、認知的側面から分析を行い、音楽の「知覚」と「感受」を明らかにするとともに、「創作」と「鑑賞」の活動において、有機的・効果的関連を図る意義を明確にする。
- (2) 生徒の聴取などに関する実態調査を実施・分析し、指導上の課題を明らかにする。
- (3) 「創作」と「鑑賞」の活動を有機的・効果的に関連付けた題材を設定し、音の意識化を図る指導法の工夫や、イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫を行う。
- (4) 検証授業を通して、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

「創作」と「鑑賞」の活動を有機的・効果的に関連付けた題材を設定し、音の意識化を図る指導法の工夫や、イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫を行うことによって、生徒は、音や音楽を知覚し、感受する力を高めることができるのではないかと考える。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題の基本的な考え方

- (1) 「音や音楽を知覚し，感受する」とは
音や音楽を知覚し，感受する力は，音楽活動を行う上で基盤となる能力であり，様々な音楽活動を通じて高められる。音や音楽を知覚し，感受する力を高めることで，音楽をより深く味わうことができ，豊かな音楽活動を通して豊かな感性がはぐくまれる。そして，それは豊かな情操を養うことにもつながると考える。

中学校学習指導要領解説音楽編では，

「本来，知覚と感受は一体な関係にあると言えるが，指導に当たっては，音楽を形づくっている要素のうちどのような要素を知覚したのかということと，その要素の働きによってどのような特質や雰囲気を感じたのかということとをそれぞれ確認しながら結び付けていくことが重要となる。」と述べられている。ここでいう「知覚」とは，聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し，意識することであり，「感受」とは，音や音楽の特質や雰囲気などを感じ，受け入れることである。

本研究では，「音や音楽を知覚し，感受する」とは，意識的に聴き取った音楽の諸要素とそれ

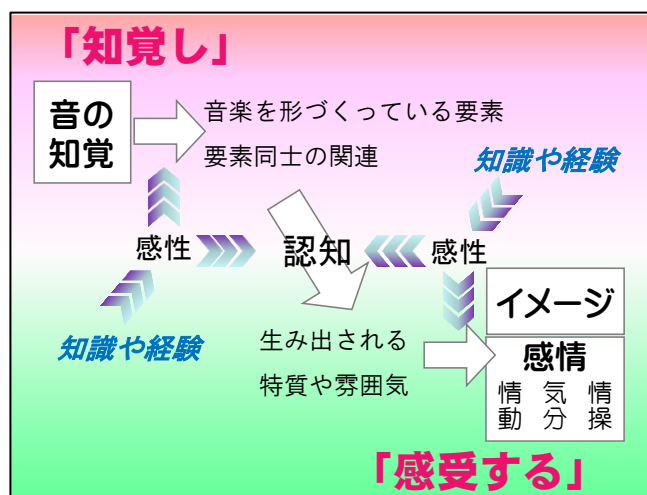


図1 「知覚し，感受する」認知モデル

らによって生み出される特質や雰囲気などとの結び付きを認知し、音楽を味わうことであると解釈する。ここでいう「認知」とは、感性を働かせ、音や音楽をこれまでの知識や経験と結び付けることである。認知して聴くことによって、より深く明確なイメージや感情がもたらされると考える（図1）。

本研究で目指す音や音楽を知覚し、感受する力の高まった生徒の姿を図2のようにとらえる。

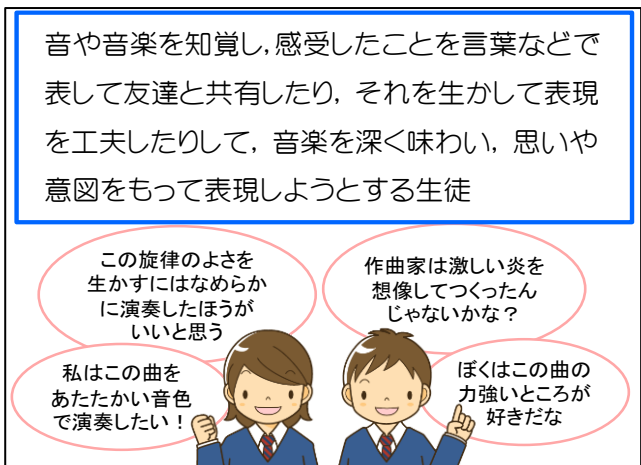


図2 音や音楽を知覚し、感受する力の高まった生徒の姿

(2) 表現と鑑賞の「有機的・効果的な関連」とは

音楽は、様々な要素が総合的かつ複雑にかかわり合いながら成り立っている有機体のようなものであるととらえることができる。そのため、音楽の本質を学ぶには、様々な音楽活動を互いに関連させながら学習を行うカリキュラムが必要であると考ええる。

表現活動と鑑賞活動は、表裏一体であり、表現の能力が高まることと鑑賞の能力が高まることは対になっている。例えば、ある旋律におけるリズムの特徴を聴き取る活動とその旋律にふさわしいリズム伴奏を考える活動は密接なかわりがあるということができ、リズムの特徴をつかむ能力が高まれば、その旋律に合ったリズム伴奏を生み出すことも容易になると考えられる。このような活動を繰り返し、感性を働かせながら音や音楽を知覚・感受していくことによって、音楽の諸能力が高まり、さらに、豊かな感性がはぐくまれていく。このような表現と鑑賞の関係に着目し、音楽学習に対する意欲の喚起や音楽の構造の理解などをねらいとして、様々な活動を意図的に関連させて指導計画の中に配置する。そして、学習したことをそれぞれの活動で生かせるよう、表現と鑑賞のつながりを意識させる手だてを講じることが、音楽科における「有機的・効果的な関連」を図ることであると考ええる。

西園^{*1)} (1993)は、音楽科のカリキュラムを、「演奏中心」、「概念中心」、「生活中心」、「人間中心」の四つに類型化している（表1）。

表1 音楽科カリキュラムにおける類型

カリキュラムの類型	特徴	中心教材	○長所・●短所	背景教育思想とカリキュラムの基本概念
演奏中心のカリキュラム	楽曲を題材とし、演奏表現を通して音楽の習得をねらいとする。	演奏活動	○ 演奏表現のための感覚や技能が上達する。 ● 演奏の技能ばかりが重視されてしまう。	本質主義教育思想 音楽の教育的価値を音楽の内側（本質）に置き、音楽の本質を習得することによって伝統的な音楽を保持していこうというカリキュラム。
概念中心のカリキュラム	音楽概念（音楽の構成要素と音楽の内的作用）を中心にカリキュラムを構成する。	聴取活動	○ 音楽の理解を中心に学習が進められるため、音楽概念を習得しやすい。 ● 概念の学習のみに終わってしまう場合がある。	進歩（経験）主義教育思想 音楽の教育的価値を音楽の外側に置き、音楽を通じ生徒の生活・個性・創造性などを開発し育成していこうとするカリキュラム。
生活中心のカリキュラム	生活経験を中心にカリキュラムを構成する。	民謡	○ 学習した音楽と生活のつながりをとらえやすい。 ● 民謡以外の音楽を理解できる能力が習得されない。	
人間中心のカリキュラム	音楽文化を通じ個人の能力と個性の開発・育成に重点を置いている。	創造的音楽活動	○ 音楽の概念を、経験を通して学習するために、音楽概念を認識しやすい。 ● 活動のみで終わってしまい、音楽概念の理解につながらない場合がある。	

（長所・短所については筆者の分析による）

音楽科教育は、明治期に導入された唱歌教育の流れから、これまで「演奏中心の音楽科カリキュラム」を主流として行われてきた経緯がある。昭和26年の学習指導要領において、「生活中心の音楽科カリキュラム」の理論が取り入れられ、また、平成元年の学習指導要領では、「人間中心の音楽科カリキュラム」にお

*1) 西園芳信 『音楽科カリキュラムの研究』 1993 音楽之友社

いて重視されている「創造的音楽活動」の理念が取り入れられ、今回の改訂でもその理念は踏襲されているが、依然として、「演奏中心のカリキュラム」への偏重がうかがえる。

新学習指導要領では、〔共通事項〕を新たに設け、音楽を形づくっている八つの要素を示し、要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することを、表現及び鑑賞の活動を通して指導するとしている。これは、音楽の構成要素を中心に構成される「概念中心の音楽科カリキュラム」の理論を反映しているにとらえることもできる。そして、学習指導要領解説では、「〔共通事項〕をよりどころとして、表現と鑑賞の相互関連を図った題材の指導計画を作成したり、歌唱、器楽、創作の相互関連を図った題材の指導計画を作成したりすることも重要である。」とし、「各学年の内容（中略）の指導については、それぞれ特定の活動のみに偏らないようにすること」や「各活動を有機的かつ効果的に関連させることによって教科及び学年の目標を実現していくように、内容の構成や主題の設定、適切な教材の選択と配列などに配慮することが大切である。」と述べている。

本研究では、四つのカリキュラム類型のそれぞれのよさを生かし、指導内容や生徒の実態に応じて、「概念中心のカリキュラム」の理論を軸に、創造的音楽活動や身近に感じられる音や音楽を取り入れ、有機的・効果的な関連を図ることとした。

(3) 音や音楽を知覚し、感受する力を高める「創作」と「鑑賞」の有機的・効果的な関連とは

「鑑賞」は、様々な要素の組合せから生み出される特質や雰囲気を感じ取り、自分なりのイメージや思いをもつ活動である。一方「創作」は、様々な要素の組合せを試しながら自分のイメージと結び付けて音をつなぎ合わせ、音楽をつくっていく活動であり、「鑑賞」とは逆の思考過程をたどるものである。この二つの活動を関連させながら学習することで、互いの活動の充実が図られ、より豊かな音楽活動へとつなげることができる。考える。

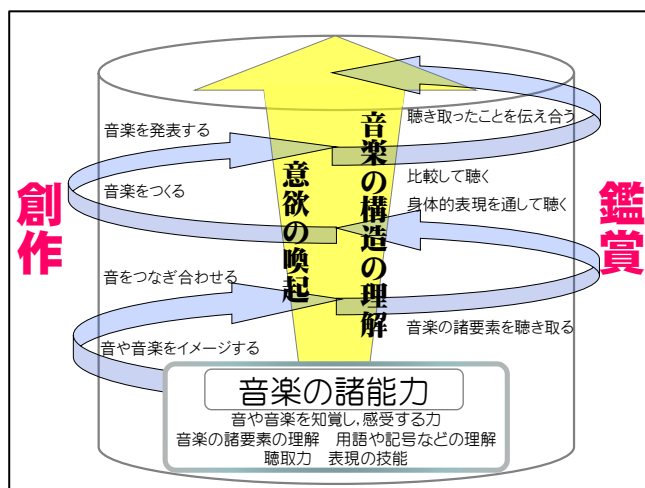


図3 「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材

本研究では、「創作」で自分のイメージをもち、音を音楽へとつなぎ合わせる活動を通して音楽の諸要素の働きに気付かせる。さらに「鑑賞」で音楽の諸要素を聴き取る活動を通してそれぞれの要素のかかわりによって特質や雰囲気が生み出されるといった音楽の構造を理解させたり、「鑑賞」でもった「こんな音楽をつくりたい」という意欲を「創作」につなげ、自分の作品をつくらせたりするなどして、「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けることで、音や音楽を知覚し、感受する力を更に高めることができるのではないかと考えた（図3）。

2 生徒の実態調査の分析と考察

研究を進めるに当たって、生徒が音や音楽をどのようにとらえているかを探るために実態調査を実施した。

(1) 内容と方法

ア 対象・調査日 花岡中学校1年生33人・平成22年6月23日（水）

イ 調査方法と内容

- (ア) 質問紙法：音楽に関する生活経験や学習経験、嗜好や観念、音楽の学習態度、音や音楽の知覚や感受について

(イ) 実音テスト

① 音や音楽の各要素を聴き取れるか。(テスト法)

② 音楽をどのように聴取しているか。(記述法)

(2) 分析と考察

ア 音楽に対する意識と聴取の実態

多くの生徒は、音楽が好きであると感じている。歌唱については好きだと回答している生徒が多いが、創作活動について、好きだと答えた生徒は少ない(図4)。これらの結果は、今までの学習経験が影響していると思われ、「創作」については自ら音楽をつくるよろこびを味わうことを体験したことがないと推測される。

鑑賞の活動が好きだと肯定的に回答した割合は表現のいずれの活動より高くなっている(図4)が、表層的なものにとどまっていることがわかる(図5)。特に、「先生が示したポイントを意識して鑑賞している」の項目に対し、「当てはまる」と回答した生徒は6.1%と、低い割合となっている。これは、鑑賞させる際に、教師が活動のねらいと生徒の実態を踏まえた明確な視点を十分に与えることができていないためか、生徒の音楽の諸要素についての理解が不十分であるため、鑑賞の視点を示しても伝わっていないことによるものと考えられる。

実音テストの音や音楽の各要素を聴き取れるかについての調査における正答率の全体平均は50.4%であった。読譜の知識が必要な問いでは正答率が低くなる傾向が見られた。特に、複合的な要素の聴取の正答率が低く、音楽を形づくっている要素についての理解が不足していると考えられる(図6)。

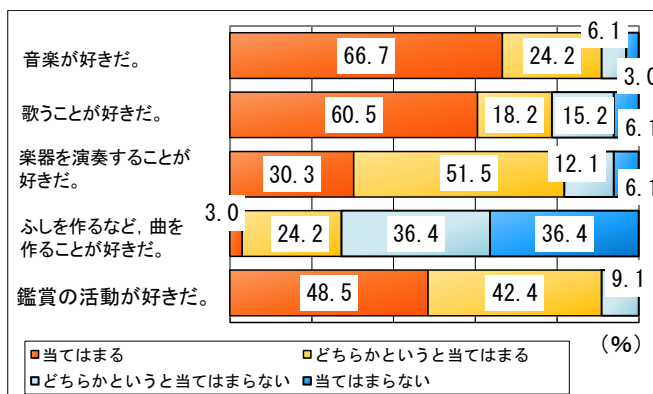


図4 音楽活動について

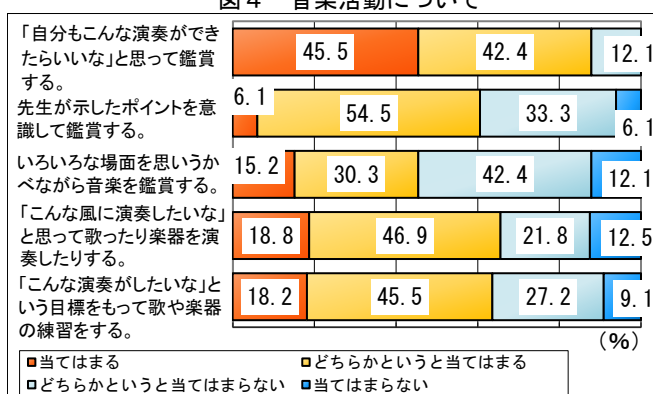


図5 音楽活動への臨み方

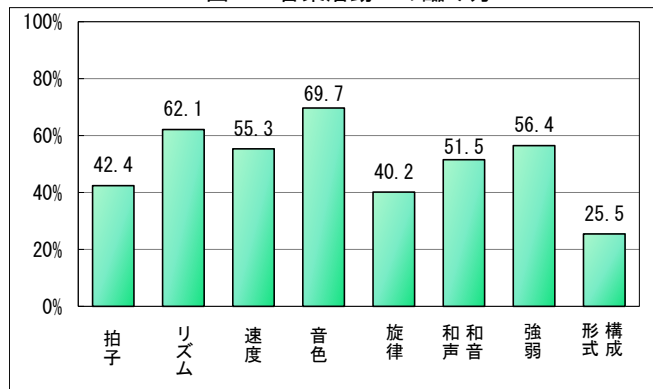
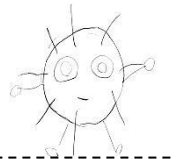


図6 音楽の諸要素の理解 (正答率)

ア 情動を表しているもの 高くなったり低くなったりの繰り返し テンションが高い 気持ちがいい	ウ 感受を表しているもの ・外国の祭りとかで流れていそうだった。 ゆうえんちにいってにぎやかを感じた。 行進曲みたい。 たのしくて元気な明るい曲。 バウカンパネンと言ってるみたい。 静かになったりする。 小鳥が飛んでいるみたい。 パレードみたい。 大げさ。 力強い。	エ 絵で表しているもの ジブリ映画のような歌 
イ 音楽の要素を表しているもの 同じ主題がちょっと変わって何回も出てきた。全体的に明るい長調の曲だけれどときどき短調の部分もあった。最後のコーダの部分はやっぱりにぎやかになった。		

資料1 音楽を鑑賞した感想 (鑑賞曲「ウィーンの音楽時計」)

音楽をどのように聴取しているかについて自由に記述する項目では、特質や雰囲気をとらえて感受することは概ねできているが、音楽の諸要素や要素同士の関連、曲の構造といったものをとらえて知覚できていない傾向が見られた。その原因は、音楽の諸要素についての理解が十分でないことや音楽の諸要素をとらえて聴くといった学習経験が不足しているためと考えられる。また、言葉でなく絵で表現する方法を好む生徒も1割程度いた。全体的に、聴き取ったことや感じ取ったことを適切に表現するための語彙が不足している（資料1）。

イ 表現と鑑賞の関連性の認識

鑑賞しているときに「こんな風に表現したい」、「こんな表現の仕方があるのか」などといった思いをもったり、表現活動に取り組むときに「こんな風に演奏したい」、「こんな演奏にするためにこういうことに気を付けよう」と練習に取り組んだりする意識がやや低いことがわかる（図5）。学習の関連性に気付き、学んだことを生かそうという思いをもつことができていないといえる。これは、表現と鑑賞を関連させた指導がこれまで十分に行われてこなかったことが原因と考えられる。

これらの実態から、様々な音楽活動を通して、主体的に音と向き合わせ、音楽を形づくっている要素などを知覚させ、そのかわりから生み出される特質や雰囲気を意識的に感受させることが必要であるといえる。そして、音楽の多様な表現のおもしろさに気付かせたり、自分なりにその音楽のよさを感じ取らせたりして、「こんな表現がしたい」という明確な思いをもたせるような指導が必要であると考えられる。

3 音や音楽を知覚し、感受する力を高める音楽科学習指導の構想

(1) 「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の開発〔視点1〕

ア 題材開発のための視点

研究の基本的な考え方に基づき、図7のように題材を開発することとし、題材開発の各過程で工夫を行った。ここでは特に、題材開発のための視点として、次の(ア)～(エ)について述べる。

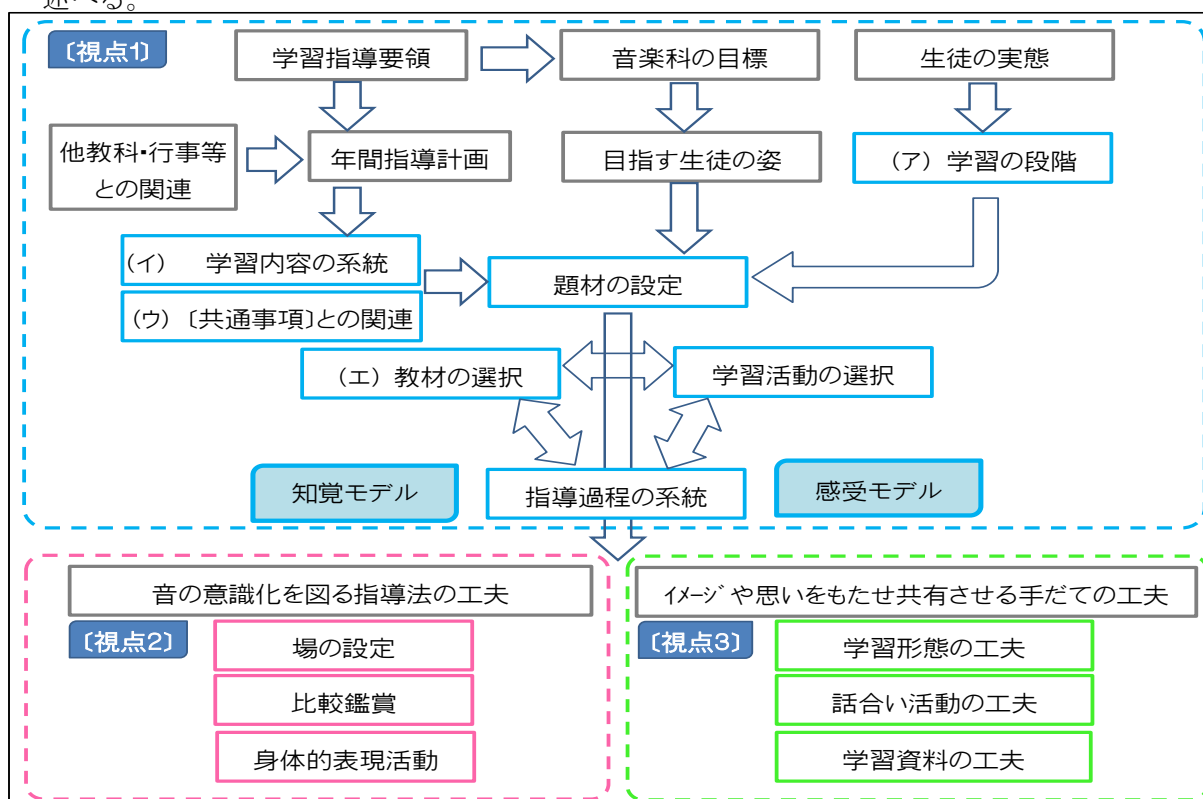


図7 表現と鑑賞を有機的・効果的に関連付けた、音や音楽を知覚し、感受する力を高める題材開発の流れ

(ア) 学習の段階

「創作」と「鑑賞」の学習の段階について、図8、9のように考えた。

「創作」においては、生徒が音をつなぐことのおもしろさに気付き、音楽をつくる楽しさを味わうことを第一の段階とし、さらに、「作品をつくり上げたい」、「もっとよい作品をつくりたい」といった意欲を喚起させながら、音楽を形づくっている要素や構造を理解させ、音楽表現の深まりへとつなげていく学習過程が望ましいと考えた。

「鑑賞」においても、まず、音楽を聴く楽しさに気付くことを第一の段階とし、音楽を形づくっている要素について知覚したことと音楽の特質や雰囲気について感じ取ったことを結び付けて聴く学習過程を通して、より深く楽曲のよさを味わうことができると考えた。

1 題材において、学習の段階が高まっていくように学習活動の工夫などを行うことはもちろんであるが、3年間を見通して、指導に当たることも必要であると考えます。

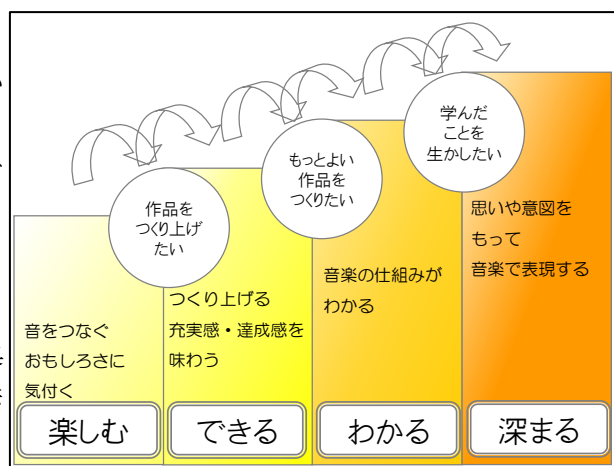


図8 「創作」における学習の段階

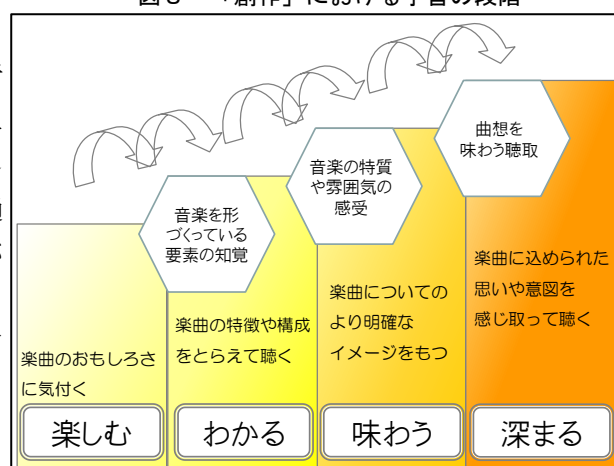


図9 「鑑賞」における学習の段階

(イ) 学習内容の系統

音楽科の学習内容は、発達の段階を踏まえ、学んだことを土台としながら発展していくように活動項目ごとに示されている。学習を進める上で、これまでの学習内容が確実に身に付いていることが求められ、定着が図られていないのであれば、それを補完するようなカリキュラムが必要であると考えます。

そこで、本研究では「創作」と「鑑賞」に関する学習内容の系統表（表2、3）を活用して、指導内容を検討したり、指導計画を作成したりするなどした。

表2 「創作」に関する内容の系統表

小学校			中学校	
音楽づくり			創作	
第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	第1学年	第2学年及び第3学年
ア 声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。	ア いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること。	ア いろいろな音楽表現を生かし、様々な発想をもって即興的に表現すること。	ア 言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること。	ア 言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること。
イ 音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。	イ 音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。	イ 音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること。	イ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること。	イ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること。

表3 「鑑賞」に関する内容の系統表

小学校			中学校	
第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	第1学年	第2学年及び第3学年
ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。	ア 曲想とその変化を感じ取って聴くこと。	ア 曲想とその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。	ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。	ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。
イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。	イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴くこと。	イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。	イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること。	イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。
ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。	ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くこと。	ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。	ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。	ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。

(ウ) 「共通事項」との関連

「共通事項」は、歌唱、器楽、創作、鑑賞の各活動の支えとなるものであり、表現及び鑑賞の各活動と関連させて指導することと以下のように示されている。

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること。

イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解すること。

表4 「共通事項」に示された音楽を形づくっている要素に関する系統表

	小学校			中学校		
	低学年	中学年	高学年	1年	2年	3年
音色	音の高低 打楽器	音色の違い 鍵盤楽器	音色の特徴 管弦楽器	音色の特色 和楽器	音色の特徴・特色 合唱・重唱・独唱	発声・声域の違い 管弦楽・弦楽合奏・吹奏楽・独奏
リズム	2・4・8分音符(休符)の単純なリズム	付点のリズム	シンコペーションなど	複雑なリズム 三連符	フェルマータ	
拍子	2・3拍子 拍の流れ	4拍子	6拍子 拍節的・拍節的でない	単純拍子 拍	複合拍子 間	
速度	速い⇔遅い	速度の変化		速度の感じ方	Andante Moderato Allegro	速度の変化 序破急 accel. rit.
強弱	強い⇔弱い	強弱の変化	<i>f, p, mf, mp</i> <=>	<i>pp, ff dim.</i>		
旋律	重なり	繰り返す・変化	主旋律・対旋律	動機	主題	
フレーズ	なめらかな⇔はずむような	旋律の特徴				
テクスチュア	和声 和音	2声・2部 2部以上 明るい響き⇔暗い響き	I・IV・V・V7の和音	3部 3部以上 和声進行の変化		
音階	音階	日本の音階・民謡の音階		平調子	様々な旋法	
調	階名	ハ長調・イ短調	その他の調		無調音楽	
構成	反復・問いと答え	変化	音楽の縦と横の関係 曲のまとまり	反復 応答 展開		
形式				二部形式 三部形式	ソナタ形式 フーガ	段物 交響詩 交響曲 協奏曲

題材の設定に当たっては，〔共通事項〕の内容を押さえ，各活動とどのように関連させて指導するかという視点を持ち，題材のねらいによっては，〔共通事項〕の内容を指導計画の中に示し，指導内容の明確化を図ることが必要である。また，音楽を形づくっている要素については，その系統性を踏まえ，生徒の実態に応じて指導することが求められる。そこで，表4の系統表を作成し，実際の指導に役立てた。

(エ) 教材の選択

「創作」と「鑑賞」の関連を図る際には，題材のねらいに応じて，創作活動と効果的に関連付けられる鑑賞教材を選択する必要がある。指導のねらいに適切な教材を，生徒の興味・関心や学習の実態などに応じて多種多様な音楽から選択することが望ましいと考え，教材の選択に当たった。

イ 音や音楽を知覚し，感受する力を高める題材モデルの例

「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の中でも，特に，音や音楽を知覚し，感受する力を高める題材のモデルとして次の二つを考案した。

(ア) 知覚を学習の柱とした題材モデル（知覚モデル）

これは，音楽の構造の理解をねらいとし，音楽の諸要素や構造，曲想とのかかわりを知覚しながら系統的に学習できるように，各活動を関連させて構成したものである（図10）。

例えば，リズムについての学習であれば，簡単なリズムパターンなどをつくった後で，リズムに特徴がある楽曲を鑑賞する中でリズムを聴き取り，そのよさを味わうといった題材などが考えられる。

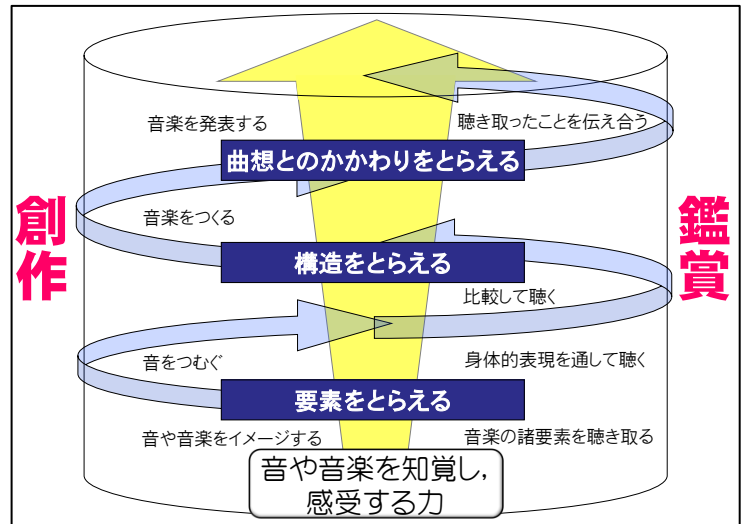


図10 知覚を学習の柱とした題材モデル（知覚モデル）

(イ) 感受を学習の柱とした題材モデル（感受モデル）

これは，題材全体を通して，音楽を感受しながらイメージが広がるよう，各活動を関連させて構成したものである（図11）。

例えば，「宇宙の音楽」という題材では，宇宙をイメージさせる音色や音の組合せを試行錯誤しながら考えたり，宇宙に関係する楽曲を鑑賞したりする活動などを通して，イメージを広げていくといった学習が考えられる。

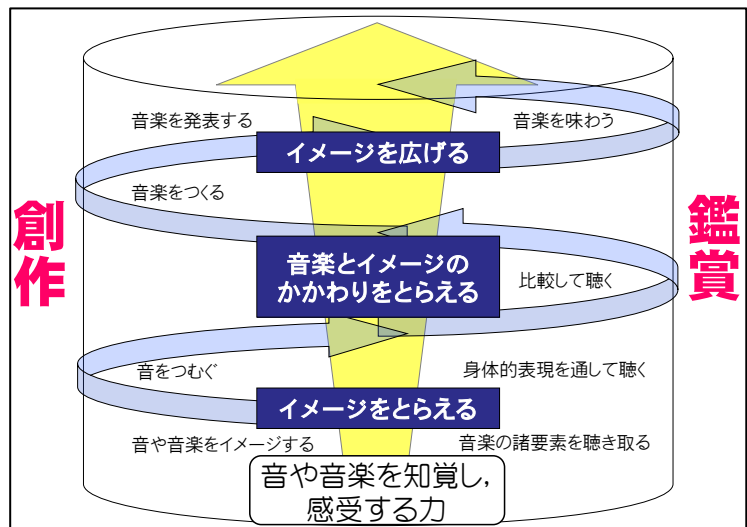


図11 感受を学習の柱とした題材モデル（感受モデル）

(2) 音の意識化を図る指導法の工夫〔視点2〕

音や音楽を知覚し，感受する力を高めるためには，まず，音の意識化を図る必要があると考える。音の意識化とは，集中して音をとらえ，聴取を深化させることである。

音の意識化を図るためには、音を意識して聴く場と音を聴きたいという姿勢が必要であると考えられる。現代人は何かをしながら音楽を聴くことに慣れている。よって、生徒には音楽にじっくりと聴き入るという意識があまり見られない。音を意識して聴く体験を積み重ねることで、音楽にじっくり聴き入るという聴取の深化が図られる。

そこで、音を意識して聴こうとする姿勢をもたせる「つかむ」、音と向き合い試行錯誤しながら音楽や音楽に対するイメージを構築する「つむぐ」、みんなで音楽や音楽に対する思いなどを共有する「ひらく」という場を設定し、音の意識化を図ろうと考えた（表5）。

また、身体的表現を取り入れた鑑賞活動や、比較して鑑賞する活動なども音の意識化を図るために有効であると考えられる。

表5 音の意識化を図る場の設定

	場の設定のねらい	教師の働き掛け	考えられる学習活動	
			創作	鑑賞
つかむ	興味・関心をもたせ、音を意識させる。	- 教材提示の方法を工夫する。 - 音そのものを意識しやすいような活動を設定する。	○ 創作の発想 ○ 音素材の選択（音探しなど）	○ 要素の聴取 ○ 身体的表現を通じた音の聴取
つむぐ	試行錯誤しながら音楽や音楽のイメージを構築させる。	知覚と感受のかかわりをとらえさせるための発問や課題設定、学習活動を工夫する。	○ 音楽表現の工夫（要素の組合せ・演奏方法の工夫など） ○ 即興的表現	○ 楽曲の分析（比較鑑賞など） ○ 楽曲についての話し合い活動
ひらく	音楽や音楽に対するイメージや思いなどを共有させる。	- 言葉や音楽で表現させるための手だてを工夫する。 - 他の人の作品や意見のよさに気付かせる。	○ 作品の発表・鑑賞 ○ 感想の発表 ○ 相互評価	○ 感想の発表 ○ 意見交換 ○ 相互評価

新学習指導要領では、表現の指導において、指揮などの身体的表現を取り上げるように求めている。「鑑賞」においても、身体的表現を通して知覚したり、感受したりすることで、音楽を能動的に聴き、感覚的に音楽の諸要素をとらえることができると考える。

比較して鑑賞する活動は、能動的な聴取によって成立する。比較することで、音楽の諸要素はとらえやすくなり、曲の違いを分析することで、根拠をもって、音楽の諸要素とその要素同士のかかわりから生み出される特質や雰囲気を感じ取ることもできる。音楽の諸要素と特質や雰囲気の関連について、理解を深めることで、鑑賞の意欲も更に高まると思われる。

(3) イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫〔視点3〕

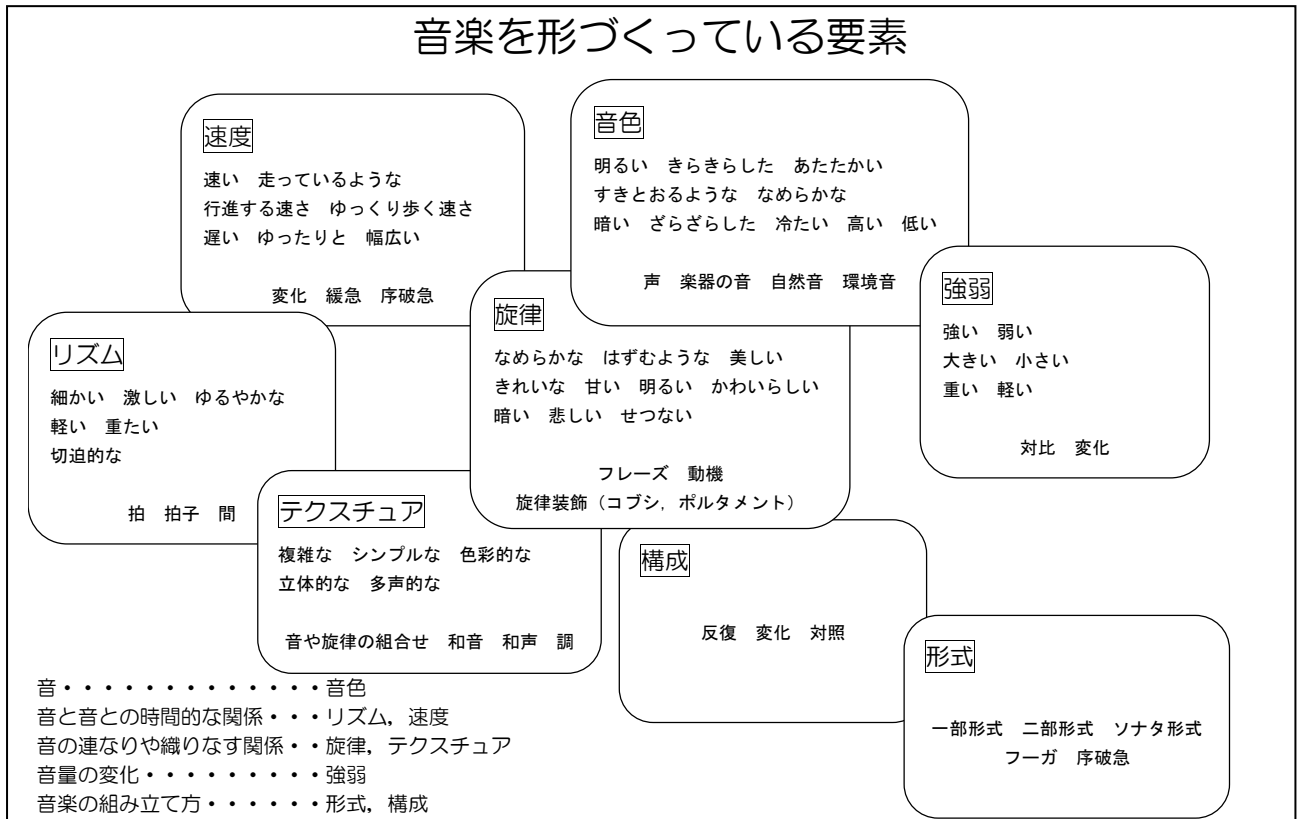
音や音楽を知覚し、感受したことをより明確にしていくことが、自分なりのイメージや思いを深めることにつながる。また、音楽のよさを集団で共有することで、一人一人のイメージも更に広がり、音楽活動の深化が図られる。学習指導要領解説では、音楽を共有する方法について、「創作の活動では表現したい内容を記譜したりイメージなどを適切な用語を用いて伝え合ったりすること、鑑賞の活動では音楽のよさや美しさなどについて音楽に関する用語などを用いて言葉で説明したり、それを基に話し合ったりすることなどの学習が意味をもつ。」としている。

そこで、イメージや思いを共有させる活動を学習過程に位置付けるとともに、音楽を共有する場となるグループ活動の充実を図るため、意図的なグルーピングや話し合い活動の工夫を行うこととした。

また、音楽に対する自己のイメージや思いなどを他者と伝え合ったり、他者がどのようなことを意図しているのかを考え、それに共感したりするためには、言葉によるコミュニケーションが必要となる。そこで、イメージや思いをより明確にもち、他者に伝えるための音楽を表す語彙力を身に付ける一助として学習資料を作成した。

まず、音楽の諸要素についての理解が不十分で、その要素をどういった視点で聴けばよいのかわからない、もしくは、どのような言葉で表現すればよいかわからないといった生徒の課題から、「音楽を形づくっている要素」を一覧にまとめた（資料2）。

さらに、平成21年度の長期研修における小学校音楽の実践を基に、これまで用いられてきた教材やその他の多様な楽曲の分析を行うとともに、音楽の教科書に使われている言語表現を参考に、中学校での学習に応じた「音楽の感じを表す言葉」の一覧表を作成した（資料3）。



資料2 「音楽を形づくっている要素」

おかしい			のどかな	静かな
おもしろい			ほがらかな	おだやかな
わくわくするような			ほのぼのとした	おちついた
	おどるような		いやされるような	ゆったりとした
	リズムカルな	軽快な	気持ちがやわらぐような	気持ちが静まるような
	はぎれのよい	さわやかな		うっとりするような
	はずむような	爽快な	かわいらしい	
	とびはねるような	希望にあふれる	甘い	じんとかるような
	うずうずするような	夢がふくらむような	なつかしい	しみりとした
たのしい		美しい	しみじみとした	せつない
うれしい	元気な	なめらかな		はかなげな
明るい	生き生きとした	流れるような	うたうような	哀愁のある
にぎやかな	はつらつとした	優雅な	お話しするような	
いそがしそうな	元気が出るような	鮮やかな	ささやくような	
	勇気がわくような	色彩的な	ゆれているような	不思議な
		多彩な		神秘的な
	堂々とした			ミステリアスな
	おおらかな			
	はっきりとした			
力強い				
迫力のある				
		きらめくような		
		きらきらした		
		輝きのある		
		華やかな		
		華々しい		
		華麗な		
	重々しい			
	重苦しい			
	激しい			
	荒々しい			
			怖い	さびしい
			不気味な	かなしい
			そっとするような	暗い
			はっとするような	
			ぞくぞくするような	
			鳥肌がたつような	

資料3 「音楽の感じを表す言葉」

また、音を媒体としたコミュニケーションが音楽の本質であることから、イメージや思いを言葉にするだけでなく、音に表していくことが重要であるとする。学習指導要領解説でも、音楽に関する言葉を用いて、音楽に対するイメージ、思い、意図などを相互に伝え合う活動を取り入れることによって、結果として、音によるコミュニケーションを一層充実させることに結び付くよう配慮することが大切であると述べている。授業においては、言葉だけでなく、音を通して思いやイメージを共有させていくよう配慮することとした。

4 検証授業Ⅰ（知覚を学習の柱とした題材）の実際と考察

(1) 検証授業Ⅰの概要（平成22年7月実施）

ア 実施学級 鹿屋市立花岡中学校 1年生 33人

イ 題材名 「音の世界をひろげようⅠ」

(2) 検証授業Ⅰの実際と考察

まず、音を意識して聴こうとする能動的な態度を養いたいと考え、第1時の「創作」で、和太鼓を用いた即興的表現で花火を描写する学習を行った。活動を通して、音素材の特徴や、音素材と表現したいイメージとのかかわりを感じ取らせた。次に、第2時の「鑑賞」で、描写音楽に含まれる描写音を聴き取り、聴き取った音と表される情景とのかかわりから、音楽の諸要素を意識して知覚する学習を行った。

そして、第3時の「創作」では、様々な音素材を用いて、情景を表現する活動を行い、試行錯誤する中で、音楽の諸要素のかかわりについて気付かせた。さらに、第4時の「鑑賞」では、映画音楽を通して、映像と音楽の関係について考えさせるとともに、音楽の諸要素から生み出されている特質や雰囲気を感じ取り、音楽によって喚起されたイメージや感情と映像のかかわりなどについて、自分なりの言葉で表現させる活動に取り組ませた（図12）。

〔視点1〕「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の開発

観点	指導の実際	考察（成果○と課題△）
学習の段階	音をつなぐおもしろさや音楽の諸要素から生み出される楽曲のおもしろさに気付かせる「楽しむ」の段階として設定した(図8, 9)。	○ 生徒は、楽器の響きを楽しみながら自分のイメージと結び付けて創作に取り組むことができた。
内容の系統	今後の学習に生かせるよう、小学校での既習事項を確認しながら、音楽の構造についての基礎的な事項を学習することとした。	○ 音楽の構造についての概念を理解させることはできた。 △ 一つ一つの要素についての理解が十分でなかった。
〔共通事項〕	系統性を踏まえて〔共通事項〕を指導計画の中に位置付けた。	○ 〔共通事項〕と指導内容の関連を明確にしたことで、指導内容を焦点化でき、活動の中でも要点を確認しやすかった。

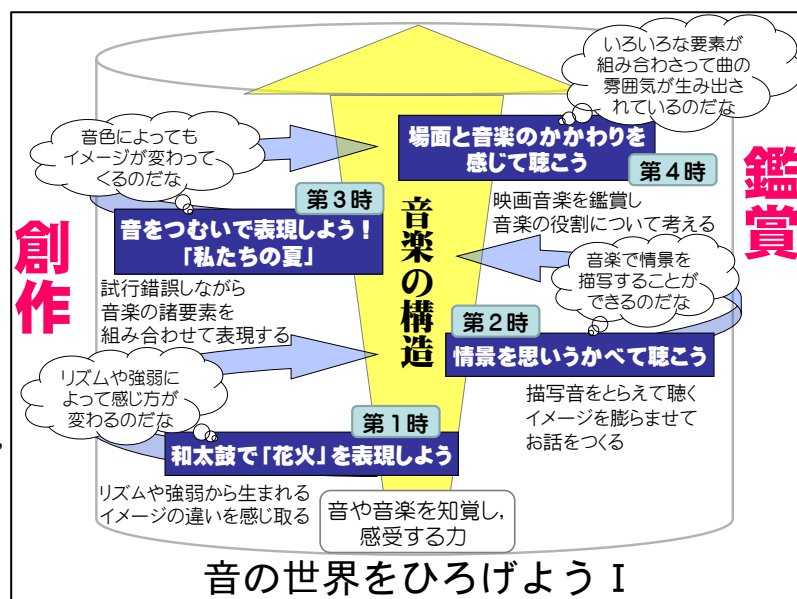


図12 検証授業Ⅰの題材構造図

教材の選択	音の要素をとらえたり、音とイメージを結び付けたりしやすい描写音楽、標題音楽と映画音楽を取り上げた。	○ 描写音の聴取などの活動を通して、小学校で学習したことを生かして理解につなげることができた。
	素材としての音を意識させるために響きを体全体で感じ取ることのできる和太鼓や音色を感じ取らせやすい打楽器を用いた。	○ 和太鼓の響きを体全体で感じながら感覚的に音の諸要素をとらえさせることができた。
指導過程	単一の要素のみで音楽を構成できるリズムから、強弱、音色、旋律など他の要素も含んだ音楽の知覚へとつながるように「創作」と「鑑賞」を交互に配置した。	○ 様々な活動を通して、音楽の構成要素を系統的にとらえさせたことで、音楽の諸要素を知覚し、音楽の構造を感覚的にとらえさせることができた。
学習活動の選択	題材のねらいに適し、楽しさを味わいながら学習することのできる和太鼓を用いた即興的表現や、生徒の関心を引き出す教材選択、曲をもとにグループで物語をつくるといった学習活動をそれぞれの学習が活かされるように組み込んだ。	○ 様々な視点から音楽を聴くという体験を通して、音楽にはいろいろな聴き方があるということに気付かせ、さらに「いろいろな曲を聴いてみたい」という思いをもたせることができた。 ○ 試行錯誤しながら音をつないでいくことのおもしろさを感じ取らせ、「音楽を完成させたい」という思いをもたせることができた。 △ 楽器を演奏することのみに夢中になってしまったり、音の出し方を工夫するまでに至らなかったりする様子も見られた。 △ 活動内容が多く、音楽をじっくり聴き味わうといった時間があまりとれなかった。

〔視点2〕 音の意識化を図る指導法の工夫

観点	指導の実際	考察（成果○と課題△）
場の設定	音を能動的に聴こうとする態度をはぐくむために「つかむ」場を重視した。特に、第1時の導入では身近な環境音である足音からイメージを膨らませる活動を取り入れた（表6）。	○ 音には様々な情報が含まれており、それらを感じ取ることによって想像を膨らませることができるということを感覚的に理解させることができた。
身体的表現	第2時の描写音を聴取する活動では、リズムを手で打ちながら聴き取らせた。 第4時では、曲想の違いをとらえさせるために、曲に合わせて指揮をする活動を取り入れた。	○ リズムを手で打ちながら聴き取らせることで、リズムの特徴や変化を知覚させることができた。 △ 曲想をとらえて指揮で表現することは難しく、音楽の知覚や感受につながりにくかった。
比較鑑賞	第4時の映画音楽における場面と曲想のかかわりをとらえさせる学習で、曲調の変化の大きい部分を選択して比較する活動を取り入れた。	○ 短調から長調、なめらかな旋律からはずむような旋律へとといった要素の変化をとらえ、比較させたことで、音楽の各要素を意識して曲想を感じ取らせることができた。

表6 各時間における音の意識化を図る場の設定

活動	時	主な学習活動	場の設定			音楽を形 づくっている 要素	主な生徒の反応	
			つかむ	つむぐ	ひらく		つかむ	つむぐ・ひらく
創作	1	○ 音について考える。 ○ 「花火」で描写する音 を考え、和太鼓で表現 する。	・ 足音を聴いて様 子を思い浮かべる。 ・ 花火の様子をイ メージする。	・ 自分のイメージ に合うようにリズム や強弱などの要 素を工夫する。 ・ グループで意 見を交換しながら 表現を工夫する。	・ 作品を発表し、 相互鑑賞する。	リズム 強弱 速度	環境音の知覚 コソコソ、コンコン … 足音だ。かかとの高い 靴で歩いている。	線香花火の様子を表したい。 ↓ 音をまばらにするとバチバチと はしけている感じがするな。
	2	○ 描写音楽を聴き、聴き 取った描写音から情景 を思い浮かべる。 ○ 音楽からイメージを広 げ、物語をつくる。	・ 楽曲から描写音 を聴き取る。 ・ 描写しているリ ズムを聴き取り、 手で打つ。	・ 描写音から思い 浮かべたイメージ をつなぎ合わせ て物語をつくる。	・ 物語を発表す る。 ・ 感想を発表し、 共有する。	音色 強弱 速度 旋律 構成	描写音(楽音)の知覚 ドーン、ゴーン、 ドロドロ … 太鼓 シャリーン … シンバル	なんかフランスっぽい。 朝の感じがする。 ↓ 「フランスパンが焼けたよ。」
創作	3	○ 音楽素材の特徴をつか む。 ○ 「夏」をテーマに音楽 材を選択し、雰囲気を表 す音楽をつくる。	・ 夏の情景を思い 浮かべる。 ・ 様々な音楽材 に触れ、イメージ にふさわしい音色 を選ぶ。	・ グループ内で 意見を出し合い ながらイメージを 膨らませる。 ・ 音色や強弱、リ ズムなどの組合 せを工夫する。	・ 作品を発表し、 相互鑑賞する。	音色 リズム 速度 旋律 テクスチャ 強弱 構成	音色の知覚 祭りの感じを出すには やっぱり太鼓の音だね。	花火のきらきらした感じを表した い。 ↓ 鈴を使ってみたら合うかな？ にぎやかな感じにしたい。 ↓ 速さをだんだん速くしよう。
	4	○ 映画音楽を聴き、情景 を思い浮かべる。 ○ 映像と音楽とのかわ りについて考える。	・ 音楽から映画の 場面を思い浮か べる。	・ 構成要素の対 照的な曲を比較 して鑑賞する。 ・ 音楽から具体 的な場面を想像す る。	・ 感想を発表し、 共有する。	音色 リズム 速度 旋律 テクスチャ 強弱 構成	音楽の諸要素の知覚 ハリーポッターの曲だ！ ↓ 不気味な感じのする旋律 だな。 ゆっくりした速さだな。	・ はねるような感じ。 ・ 急いでいる。・ 慌てている。 ・ 大げさな感じ。・ 静か。 ・ 希望があらわれている感じ。 ↓ 不思議な国 空へ飛び立つ。 夢の中 冒険に出かける。 森の中 恐竜におそわれた。 いろいろな出来事が起こる。

〔視点3〕イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫

観点	指導の実際	考察（成果○と課題△）
話し合い活動	ブレインストーミングや KJ 法などの技法を話し合い活動に取り入れた。	○ 付箋に書くことで思考が目に見える形となり、生徒は意見を出しやすかった。
	見通しをもたせて活動に取り組ませることができるよう、グループ活動の進め方を示したシート（資料4）を作成し、活用を図った。	△ 話し合い活動の手順が理解できなかったことと、なかなか意見が出なかったことから一つの作業に時間がかかった。
学習資料	「音楽を形づくっている要素」や「音楽の感じを表す言葉」などの学習資料を作成し、音楽室に掲示したり、グループ毎に配布したりして活用を図った。	○ 特に鑑賞の場面において、参考にしながら自分の感じたことをどういった言葉で表せばよいかと考える様子が見られた。 △ 音楽の諸要素の特徴と感じ取った音楽の情景の区別が付きにくい生徒もいた（資料5）。 △ 一人一人がじっくりと思考していく過程では使いにくかった。

音の世界をひろげよう③ グループ活動の進め方

1 ふせん紙に書いたことを一枚ずつ読み上げる。

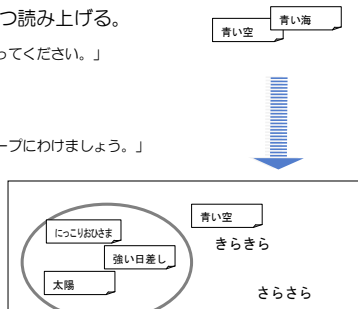
「時計回りに一つずつ読み上げて紙に貼ってください。」

2 ふせん紙をグルーピングする。

「共通するものを集めていくつかのグループにわけましょう。」

3 イメージ・マップにして表す。

(構成を図にする。)

「思いついた言葉を書きながら
きとめきとら。」

資料4 グループ活動の進め方シート

聴き取った音楽の特徴

はねるようなかんじ、かんじ
楽しい戸にのっててくあ
そう。あおててくるかんじ
不思議な国にイテきそう
夢の中、じす、かなかんじ
森の中、すこくあてきいたか
んじ
大げさなかんじ、日月、いか
んじ
希望、かある、れてくるかんじ、高から
あそんでるかんじ、森をぬけたかんじ、森

※下線部は感じ取った情景
音楽の特徴と混在している

資料5 聴き取った音楽の特徴

主な学習内容	生徒の思考
1 音からイメージが生まれることに気付く。 - 目を閉じて耳を澄ます。 - ハイヒールで歩く音を聴き取る。 - なぜわかったのか理由を考える。 - 太鼓の音で表した足音を聴いて、歩いている様子を想像し、なぜそのように想像したのか理由を考える。	コソコソ コンコン ハイヒールで歩いている。 つかむ 音？ そんな感じの音がしたから。 音の強さ、長さ、速さ、リズム… ドンドン ↓↓ 大きな足音 威張って歩いている トコトコ…
2 学習課題を把握する。 - 和太鼓をたたいて太鼓の音を体で感じる。 - 和太鼓の響きを生かして表現したいものを考える。 - 学習目標を確認する。 和太鼓で「花火」を表現しよう。	和太鼓をたたくと体中に響くよ。心臓にズンとくる感じ。 トコトコ… ↓↓ 急いで走っている トコトコトコ ↓↓ スキップしている 楽しそう
3 イメージを膨らませて「花火」を表現する。 - 花火の映像を観て、表現したい花火のイメージを膨らませる。 - 自分のイメージに合ったリズムやたたき方を工夫する。	音をまばらにするとパチパチとはじけている感じがするな。 大きな打ち上げ花火がいいな。どんなたたき方をしたらいいだろう？
4 互いに鑑賞させ、いろいろな表現の方法を認め合う。 - どんな花火か、様子を思い浮かべながら代表の発表を聴く。 - それぞれの作品をつなげて「花火大会」を表現する。 - 和太鼓で花火を表現して感じたこと、友達の演奏を聴いて感じたことを書き、発表する。 〔視点3〕イメージの共有化	線香花火の感じが出ているね。 つむぐ いろいろな大きさの花火が上がっている感じを表したいな。 ねずみ花火がぐるぐる回っている感じを表したよ。 たたく場所を少しずつずらして音の感じを変えました。 ひらく すごく大きな花火の様子を表現しています。
5 本時を振り返り、次時の学習について知る。	
- この時間で学んだことをワークシートに書く。 ～学んだこと～ - 太鼓でもたくさんのものをリズムや強弱で表現できるんだということを学んだ。 - 太鼓一つでいろいろな花火を表現できることを学んだ。	～演奏して思ったこと～ - たたく場所をちょっと変えるだけでも音がすぐ変わって面白かった。 ～友達の演奏を聴いて思ったこと～ - 打ち上げ花火でもいろんな種類の花火があってとても楽しかった。せんこう花火もずっと聞いていると本当の花火っぽく聞こえてすごいなと思った。

主な学習内容	生徒の思考
1 前時の学習を生かして、鑑賞する。 ○ 「雷鳴と電光」を聴き、どんな雷を表しているのか想像する。 ○ どんな雷の音が聴こえたか楽器の音と結び付けて考える。	ドーン、ゴーン、ドロドロドロ…太鼓 シャリーン…シンバル ↓↓ いろいろな音色で表すと感じ方が変わるなあ つかむ
2 学習課題を把握する。 ○ 本時の学習目標と学習の流れを確認する。 情景を思いうかべて聴こう。	カッコカッコ…時計の音 目覚ましのベル ボヨヨ〜ン ↓↓ 目覚まし時計を表しているんじゃないかな。
3 描写音から様子を思い浮かべる。 ○ 描写音を聴き取る。 ○ 曲を聴きながら、ウッドブロックのリズムを手で打って表す。 〔視点2〕身体的表現活動 ○ リズムを確認し、描写している様子を思い浮かべる。 ○ 音楽のもつストーリー性に気付く。	カッコカッコのリズムは時々変わっていて…最後はボヨヨ〜ンと… リズムに気を付けて聴いてみましょう。 くるった目覚まし時計が最後にはこわれてしまう様子だ！！ なんかクリスマスっぽい。 にぎやかな感じの曲だね。
4 音楽を聴き、イメージを膨らませてお話をつくる。 ○ 描写音などの音楽の要素を聴き取って付箋紙に書き、イメージを膨らませる。 〔視点3〕学習資料の活用 ○ イメージをつなぎ合わせてお話をつくる。 〔視点3〕話し合い活動の工夫	朝の感じがする。 つむぐ 行進曲みたいだ。 今日は年に一度のパーティーの日です。パーティー会場ではたくさんの人たちがおどって歌って楽しんでいます。 そんな中「フランスパン焼けたよ〜」とちゅうぼうから声がしました。ここのフランスパンはとてもおいしいと評判なのです。そのフランスパンをみんなで仲良くおいしく食べました。そんなフランスパンを食べたたくさんの人たちは満足そうに自分の家へ帰っていきました。
5 物語を発表し合い、イメージを膨らませて聴く。 ○ グループ毎に発表する。 ○ 情景を思い浮かべながらお話を聴く。 〔視点3〕イメージの共有化	クリスマスの朝、お城の王子様とお姫様が結こん式のパレードをしました。町の人たちは大感激で、たくさんの人が町に出ています。 とても楽しくすばらしいパレードができました。 ひらく
6 本時を振り返り、次時の学習について知る。 いろいろなお話ができておもしろかったな。	クリスマス、お城の王子様とお姫様が結こん式のパレードをしました。町の人たちは大感激で、たくさんの人が町に出ています。 とても楽しくすばらしいパレードができました。

(3) 検証授業Ⅰ後の生徒の感想

様々な活動を通して、生徒の音楽に対する興味・関心を高め、音楽にはいろいろな聴き方があるということを理解させることができた。また、音楽を形づくっている要素を意識しながら聴く体験を通して、音楽をより深く聴くことのおもしろさに気付かせることができた（図13、資料6）。

しかし、自分のイメージを音や音楽で表すことができた満足している生徒は、2割に満たず（図13）、作品をつくり上げる充実感や達成感を味わわせる必要があると感じた。また、音楽の構造についても理解を深めることができるような手だてが必要である。

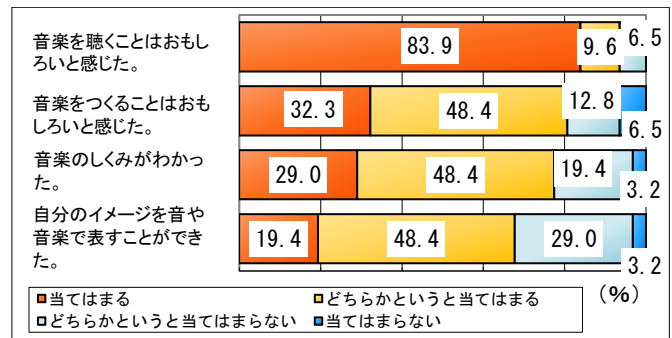


図13 検証授業Ⅰ事後アンケート

感想
音楽は数学のようにむずかしく逆に美術のようにおもしろいと感じました。(とてもおもしろかったです)

資料6 検証授業Ⅰ後の生徒の感想

(4) 検証授業Ⅰの成果と課題

成果	○ 題材全体を通して音楽の構造について感覚的に学習させることができた〔視点1〕。 ○ 様々な活動を通して、楽しみながら音楽の諸要素に気付かせたり、特質や雰囲気を感じ取らせたりすることができた〔視点1、2〕。 ○ グループ活動において、互いに意見を出し合いながら音楽をつくり上げたり、物語を考えたりしたことで、音楽のイメージをより深めさせることができた〔視点3〕。
課題	△ 活動内容が多く、音楽をじっくり聴き味わったり、イメージと音の諸要素のかかわりについて、思いや意図をもって工夫したりする時間が十分確保できなかった。活動の精選が必要である〔視点1、2、3〕。 △ 音楽を形づくっている要素についての理解が曖昧である生徒が多く、各要素を聴き取らせることが難しい〔視点2〕。 △ 音楽に関する用語などの理解については個人差が大きく、個人で活用することのできる学習資料が必要である〔視点3〕。

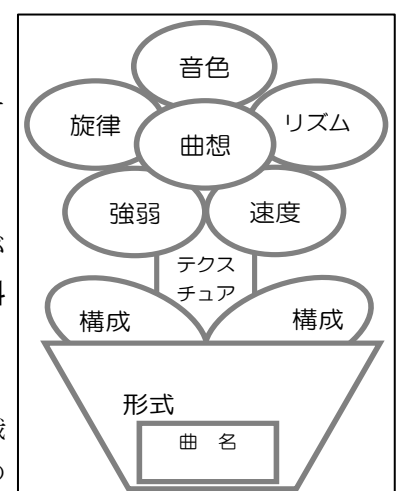
5 検証授業Ⅱに向けて

- (1) 「フラワーマップ」：音楽の知覚と感受のかかわりを認知して感じ取らせる手だて〔視点2〕

音楽を形づくっている要素についての理解が曖昧であるという課題を解決するために、音楽を形づくっている要素を意識しながら知覚・感受できるように「フラワーマップ」を作成した（資料7）。

この「フラワーマップ」は、音楽の構造をとらえやすいよう、音色・リズム・速度・強弱・旋律を花びらに、それらの要素が織りなす様相を示すテキストチュアを茎に、反復、変化、対照などの構造を葉に、そして音楽の器という意味で、形式を鉢として、〔共通事項〕に示されている八つの要素を花の形に当てはめたものである。

特に、音楽の諸要素を知覚させたり、要素同士の関連に気付かせたりする活動において、「フラワーマップ」を効果的に活用することで、音楽の知覚と感受のかかわりを認知させて感じ取らせることができると考えた。



資料7 フラワーマップ

そこで、「音楽を形づくっている要素」（資料2）と「音楽の感じを表す言葉」（資料3）を基にして更に多様な音楽についての表現を新たに加えた「曲想を表す言葉」（資料9）を記載した。また、資料8では、音楽を言葉で表すときのポイントを示し、自分の言葉で表現できるようにした。さらに、「フラワーマップ」の活用についても説明を載せるとともに、自分の見つけた言葉を書き込めるように工夫した。

ウ 音楽の概念について示す
「音楽を形づくっている要素」の他、演奏形態についての説明や「特質」や「雰囲気」、「曲想」といったとらえにくい概念についての説明を掲載した（資料10）。こうした音楽の概念をとらえ、意識しながら鑑賞することによって、更に理解を深めていくことができると思う。

音楽の感じ ～特質と雰囲気、そして曲想～

音と音が結びつき、リズムや旋律、強弱や速度が生まれます。そして、それらがかわりあって音楽の感じが生まれます。その曲を特徴づけている音楽の感じが「特質」であり、特質はその曲の「雰囲気」をつくり出します。

私たちは、曲の特質や雰囲気から音楽の情景を思いうかべることができます。「情景」とは、音楽に描かれている場面や風景、心情などのことです。さらに、情景を思いうかべながらその音楽を味わい、そこに自分の気持ちを重ね合わせて音楽を感じ取ることが、「曲想」を味わうことです。

資料10 「音楽鑑賞のすすめ：特質と雰囲気、そして曲想」

6 検証授業Ⅱ（感受を学習の柱とした題材）の実際と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要（平成22年10月実施）

ア 実施学級 鹿屋市立花岡中学校 1年生 33人

イ 題材名 「音の世界をひろげようⅡ 音楽劇をつくろう」

(2) 検証授業Ⅱの実際と考察

第1時の「創作」で、詩から音楽をイメージする活動を通して、音楽の諸要素の働きについて感覚的に感じ取らせた。第2時の「鑑賞」では、シューベルトの「魔王」を鑑賞させ、音楽の諸要素から生み出される音楽の効果を感じ取らせ、さらに、第3時ではレーヴェの「魔王」と比較させることで音楽の諸要素の関連から生み出される特質や雰囲気の違いに気付かせた。第4時の「創作」では、「鑑賞」で学んだことや深めたイメージを生かして、自分たちなりの「魔王」を音楽劇で表現する活動に取り組みさせた。第5時は自分たちでつくり上げた音楽劇を発表し、相互鑑賞させた（図14）。

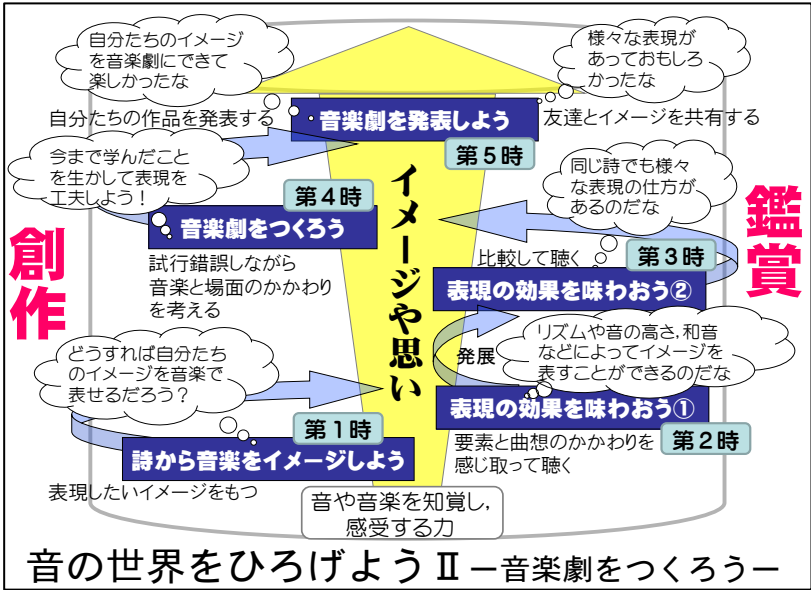


図14 検証授業Ⅱの題材構造図

で学んだことや深めたイメージを生かして、自分たちなりの「魔王」を音楽劇で表現する活動に取り組みさせた。第5時は自分たちでつくり上げた音楽劇を発表し、相互鑑賞させた（図14）。

〔視点1〕「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の開発

観点	指導の実際	考察（成果○と課題△）
学習の段階	楽曲の特徴や構成をとらえて感じ取ったことを生かして、つくり上げる達成感を味わわせることができるように、「できる」「わかる」の段階として設定した（図8、9）。	○ 題材全体を通して一つの作品をつくり上げる体験から達成感や充実感を味わわせ、さらに「よりよい作品をつくりたい」という思いをもたせることができた。

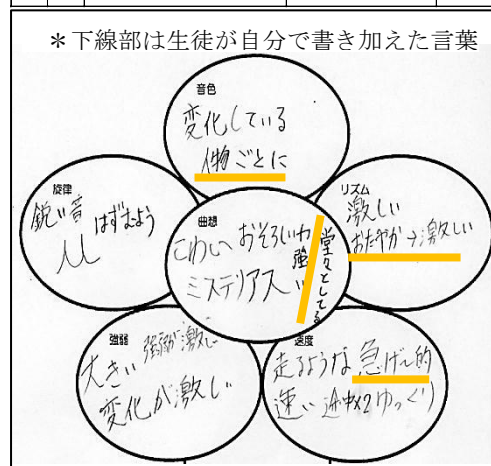
教材の選択	楽曲のもつ魅力を生かし、詩から音楽をイメージしたり、他の作品と比較したりするなど様々な活動を関連付け、よりイメージを深めることができる教材として、歌曲「魔王」を取り上げた。	○ 生徒は、シューベルトやレーヴェの「魔王」を鑑賞したことによって、作曲者の意図に気付き、学習したことを自分たちの音楽劇づくりに生かすことができた。
指導過程	イメージの広がりに着目し、「創作」や「鑑賞」を通して音楽とイメージのかかわりについて感じ取ったり、考えたりしながらイメージを広げ、それを生かして音楽劇で表現することができるように学習過程を設定した。	○ 詩から音楽を、また、音楽から情景をイメージさせ、さらに音楽劇として表現させたことで、音楽の諸要素と特質や雰囲気のかかわりをとらえさせることができ、音や音楽を知覚し、感受する力を高めさせることにつながった。
学習活動の選択	音楽だけでなく、詩や絵、身体的表現なども効果的に組合せて取り扱うとともに活動の精選を図った。	○ 様々な活動を通して自らのイメージを広げ、「魔王」という作品をより深く味わわせることができた。
	「鑑賞」では、それぞれ視点をもって繰り返し楽曲を聴く活動を行った。	○ 聴く回数を重ねるにつれて、生徒はじつくりと音楽に聴き入るようになった。

〔視点2〕 音の意識化を図る指導法の工夫

観点	指導の実際	考察（成果○と課題△）
場の設定	本題材では、音楽劇をつくり上げる過程を軸に、「つかむ」、「つむぐ」、「ひらく」場は活動の流れに応じて設けることとした（表7）。	○ 活動の流れの中で、それぞれの場のねらいを留意して指導することができ、学習のつながりを意識させることができた。
	第1時「つかむ」では、日本語に訳されたゲーテの詩を朗読し、情景をイメージさせる活動を行い、同じ詩をもとに描かれた絵を参考資料として用いた。	○ 言葉だけではイメージを膨らませることの難しい生徒は、同じ詩をもとに描かれた絵を見ながら情景をつかみ、ふさわしい音楽をイメージしてそれに合う音楽を探ることができた。
身体的表現	音楽劇をつくる過程において、身体的表現を取り入れた。	○ 場面に合わせて、動きを考えたり、音に合わせて体を動かしたりすることで、感覚的に動きと音楽のかかわりを感じ取らせることができた。
比較鑑賞	第3時では、同じゲーテの詩を基につくられたシューベルトとレーヴェの「魔王」を比較して鑑賞させた。	○ 比較して聴くことで、音楽の要素がよりとらえやすくなり、その使い方や組合せ方の違いから曲想が変化するというのを感じ取らせることができ、さらに作曲者の意図に気付かせることができた（資料12）。
	第2時では、ワークシートに記述した個々の感想の内容を当てはめながら、全員でフラワーマップを表し、要素と曲想のかかわりについて考えた。第3時では、2曲の「魔王」のフラワーマップを比較した。	○ みんなで表したフラワーマップに自分の言葉を書き加えた生徒もいた（資料11）。こうした活動によって音楽の諸要素を聴き取ろうという意識をもたせることができた。

表7 各時間における音の意識化を図る場の設定

活動	時	主な学習活動	場の設定			音楽を形づくっている要素	主な生徒の反応	
			つかむ	つむぐ	ひらく		つかむ	つむぐ・ひらく
創作	1	○「魔王」の詩から音楽をイメージする。	・ 場面に合った音楽を考える。	・ 表現の方法を工夫する。		音色 強弱 リズム	暗い。怖い。うああー。 ぞくぞくするような。 ↓ 不気味な音 暗い音 低い音	馬の足音はどんな風に表そうかな？ ↓ パカパカ 速いほうがいい。
	2	○ シューベルトの「魔王」で情景を描写するために工夫されている点を考える。	・ 描写音を聴き取る。 ・ 曲想の変化を感じ取る。	・ 音楽の諸要素から生み出される曲想の変化を感じ取る。	・ 「魔王」のよさについて考え、共有する。	旋律 音色 強弱 リズム テクスチャ 速度	力強い。迫力がある。 怒っている。悲しい感じ。 強弱が激しい。 力強いときと優しい感じのときがある。	どんな感じ？→なぜそう感じたか？ ・ 力強い迫力がある。 → 強弱が激しかったから。 ・ 恐ろしい怖い。→ 短調だから。
鑑賞	3	○ シューベルトの「魔王」とレーヴェの「魔王」を比較して鑑賞する。		・ 2曲の「魔王」を比較する。	・ 比較して気付いたこと、感じたことを共有する。	旋律 音色 強弱 リズム 速度 テクスチャ		シューベルトよりも繊細に描かれている。 同じ詩でも作曲家が変われば曲も変わる。
創作	4	○ 「魔王」の音楽劇をつくる。	・ 「魔王」の演奏している様子を鑑賞し、様々な表現の方法について気付く。	・ 音楽と台詞、動きを組み合わせる音楽劇をつくる。		旋律 音色 強弱 リズム テクスチャ 構成	場面によって表情を変えていた。 身ぶりもつけていた。 歌っている人の気持ち伝わってきた。	○ ボンゴ…馬の足音 だんだん速くしていこう。 ○ キーボード 場面に合った響きにしよう。 低くてにこった感じがいいな。
	5	○ 音楽劇を発表する。 ○ 学習のまとめをする。			・ 作品を発表し、相互鑑賞する。	旋律 音色 強弱 リズム テクスチャ 構成		班によって、音の表現のしかたや感じ方が違ってよかった。 音で人の気持ちが伝わってきた。 普通の劇よりも音で表現したりするともっと場面の様子を表すことができるんだと思った。



資料11 「魔王」のフラワーマップ

2つの『魔王』を比較してみよう

気付いたこと ・ どちらも強弱は激しい ・ シューベルトの方は走っているような感じがして、レーヴェは変化している(速度) ・ 両方怖い ・ 両方 子供のさけびが つかめてくる	思ったこと・考えたこと ・ 怖いのはいっしょ。 ・ 僕はレーヴェの方が怖い。理由は魔王がレーヴェの方がやさしそうだったから
---	---

資料12 二つの「魔王」を比較して

自分が思う『魔王』のよさは・・・ お父さん、お父さんと声が高くなっていくところだと思っています。	その理由は・・・ 声が高くなっていくと魔王が近づいてくる感じがわかりやすいからです。
--	--

資料13 自分が思う「魔王」のよさ

【視点3】イメージや思いをもたせ、共有させる手だての工夫

観点	指導の実際	考察(成果○と課題△)
学習形態	自分が気付いたことや感じたことなどをシェアリングしたり、発表したりする場面を多く設定し、自分が感じたイメージや思いを大切にさせた(資料13)。また、他の人の意見に耳を傾け、そのよさを認め合う雰囲気づくりに心掛けた。	○ 自分の思いと他の人の考えを比較したことで、曲に込められた作曲者の意図に関心をもち、自分たちの創作活動と照らし合わせて、「魔王の部分はなぜ長調にしたのだろう」、「なぜこのリズムで表現したのだろう」といった視点で楽曲に向き合うことができた。
話し合い活動	検証授業Ⅰの課題から、実際に音に触れながら話し合うことができるように学習過程を設定した。	△ 様々な発想は生まれたが、音とイメージのかかわりについてじっくり考えさせることが難しかった。
学習資料	「音楽鑑賞のすすめ」を一人一人に配布し、個々の進度に合わせて活用できるようにした。	○ 感想などを書くことに対する抵抗が少なくなり、用いる語彙を増やすことができた。

主な学習内容	生徒の思考
1 前回の学習を振り返り、今回の学習課題を把握する。 ○ 5時間の学習の流れを知る。 ○ 本時の学習目標を確認する。 詩から音楽をイメージしよう。	 おもしろそう。 音楽劇をつくるんだ。 なんだか難しそうだな。
2 詩からイメージを思い浮かべる。 ○ ゲーテの「魔王」の朗読を聴く。 ○ 詩を読んで思い浮かべたイメージをワークシートに書く。 〔視点3〕音楽鑑賞のすすめ ○ 詩を題材に描かれた絵を観て、イメージを膨らませる。	 魔王って一体何者なんだろう？ なんだか怖い感じがするなあ。 つかむ お父さんと子どもは馬に乗っているよね。
3 場面に合った音楽を考える。 ○ 表現したい場面を決める。 ○ どのような音楽が合うか考える。 ○ 情景を表すのにふさわしい音素材を選ぶ。	 馬の足音にはどの楽器が合うかな？ つかむ
4 役割を決め、表現の方法を工夫する。 ○ 音楽劇の配役や係などを挙げ、分担する。 ○ 音素材を選び、組合せを考える。 ○ グループ毎に活動の反省を行う。	 馬の走る音を入れたらどうだろう。 使う楽器はキーボードと大太鼓でいいかな？ 魔王とお父さんと子どもの役が必要だね。
5 本時を振り返り、次時の学習について確認する。 ○ この時間で学んだことをワークシートに書く。	～気付いたこと・感じたこと～ ・ 音はいろいろ表現力をもっているからそれを生かして暗い情景は低い音を使って、明るく楽しい情景は高い音を使って表現したい。 ・ 詩から音楽をイメージすることは難しかったけど楽しかった。 ・ 詩を聞くだけで音楽の感じを想像することができた。でも劇にするのは難しそうだ。 ・ 詩からこんなに音楽のイメージができるんだなと思いました。 ・ 自分で想像するのは難しかった。

主な学習内容	生徒の思考
1 前時の学習を振り返り、シューベルトの「魔王」を鑑賞する。 ○ 自分なりに感じた「魔王」のよさをペアで伝え合う。 ○ ペアで共有した「魔王」のよさを発表し、全員で共有する。 〔視点3〕イメージの共有化 ○ 友達の意見を参考にして「魔王」を鑑賞する。	 ひらく ぼくが思う魔王のよさはピアノのリズムだと思います。 私が思う魔王のよさは歌詞だと思います。 強弱がだんだん強くなっていったらあせているような感じがした。 息子が死ぬときに静かになって悲しさが伝わってきた。
2 本時の学習課題を把握する。 ○ 本時の学習目標と学習の流れを確認する。 表現の効果を味わおう。	 つかむ 子どもは病気で幻覚を見ていたのではないかな？
3 シューベルトとレーヴェの「魔王」を比較して鑑賞する。 ○ レーヴェの「魔王」を鑑賞する。 〔視点2〕比較鑑賞 ○ 気付いたことと感じたことをワークシートに書く。 〔視点3〕音楽鑑賞のすすめ ○ 気付いたことや感じたことを発表し、挙がった意見を音楽の諸要素と関連させてフラワーマップに書く。 〔視点2〕フラワーマップ ○ シューベルトとレーヴェの「魔王」を比較する。 ○ それぞれの「魔王」のよさに気付く。	○ レーヴェの魔王について ～気付いたこと～ ・ テンポが速くなったりおそくなったりしている。強弱が激しく変化している。 ・ シューベルトの魔王よりも繊細に描かれている。 ～感じたこと～ ・ 最初と最後の強弱の違いが激しく、魔王がだんだん近づいてきて息子の怖さが増していくのが分かった。 ・ ピアノの伴奏が不気味な感じがした。 つむぐ ○ 二つの「魔王」を比較して ～気付いたこと～ ・ どちらも魔王が言っているときは長調で、子どものときは短調で、だんだん強くなっていた。 ・ シューベルトよりレーヴェのほうが変化が激しい。 ～思ったこと・考えたこと～ ・ シューベルトの魔王のほうが全体的に強弱が強めで、レーヴェの魔王は、最初は弱くてだんだん強くなっていったところもあったけど、どちらも似ているところもあった。
4 本時を振り返り、次時の学習について確認する。 ○ この時間で学んだことをワークシートに書く。 ～気付いたこと・感じたこと～ ・ 作曲者が違うと「魔王」のメロディ・速さ・強弱などが違っていた。 ・ 同じ詩なのに作曲者が違うとまた違う感じ方ができて作曲者の思いが伝わってきた。 ・ 二つの曲はどちらも怖い感じがした。	 シューベルトやレーヴェという人が想像できるようでした。 曲には作曲者の思いや意図が込められているのですね。 

(3) 検証授業Ⅱ後の生徒の感想

本題材を通して、9割を超える生徒に音楽をつくるおもしろさを感じ取らせることができた（図 15、資料 14）。

さらに、「音楽劇をつくる」という一連の過程に位置付けた様々な場面において、音や音楽を知覚し、感受させることができ、さらに音楽に込められた思いや意図にも気付かせることができた。

しかし、音楽の構造（しくみ）についての理解が 15.2%と不十分であり（図 15）、検証授業Ⅰと比較しても割合が下がっている。これは題材構成の違いによるものと思われるが、音楽構造の理解につなげるための生徒の実態に応じた指導が更に必要であるといえる。

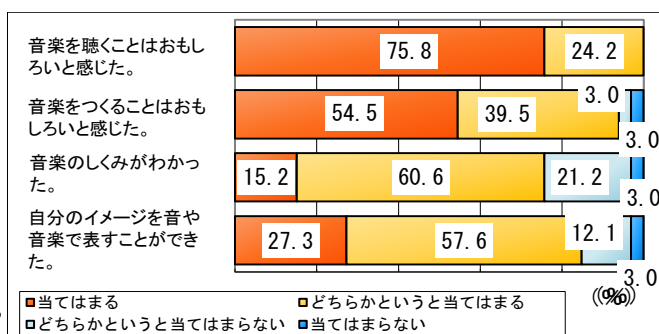


図 15 検証授業Ⅱ事後アンケート

今日また音楽のききかたをおそった気がする。それは音楽をきいて表現していったからで、最終的には「音楽劇」として音楽と劇をまぜてやりました。とてもたのしかったです。これから自分でもそうやって音楽をきかたをなと思いました。

資料 14 検証授業Ⅱの生徒の感想

(4) 検証授業Ⅱの成果と課題

成果	○ 音楽劇をつくる過程を踏まえて指導計画を作成したことで、学習に見通しや目的意識をもたせることができ、また、作品をつくり上げる達成感を味わわせることができた〔視点 1〕。
	○ 「フラワーマップ」の活用を図ったことで、音楽の諸要素の働きと曲想のかかわりを感じ取って、音や音楽を知覚し、感受させることができた。また、比較鑑賞においても、「フラワーマップ」を用いることで視覚的に比較することができ、共通点や相違点に気付かせることができた〔視点 2〕。
	○ 「音楽鑑賞のすすめ」を活用し、互いに意見を出し合いながら音楽をつくり上げたり、物語を考えたりしたことで、音楽のイメージをより深めさせることができた〔視点 3〕。
課題	△ 活動の中でじっくりと思考することが難しく、音楽活動を通して学んだ知識が身に付いていない。理解につなげていく指導法の工夫が必要である〔視点 1, 2〕。

7 生徒の変容の分析と考察

(1) 学習集団内の変容

検証授業前と各検証授業後に行った生徒の意識調査を比較すると、「曲を聴いて自分なりのイメージを思い浮かべることができる」に対して肯定的に回答した生徒は、検証授業前は約半数だったが、検証授業Ⅱの後には 96.9%に上った（図 16）。この結果は、ほとんどの生徒が音楽を主体的に聴取し、イメージをより明確に意識してとらえたことによると考える。このことから、生徒の音楽を感受する力が高まりつつあるといえる。

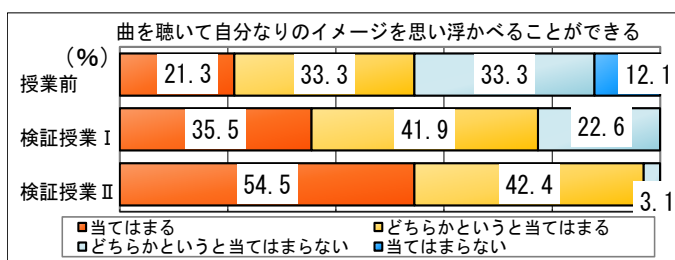


図 16 音楽の感受について

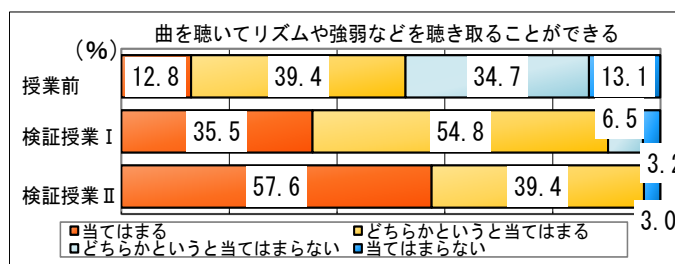


図 17 音楽の知覚について

音楽の諸要素の知覚についても、「曲を聴いてリズムや強弱を聴き取ることができる」の問いに 97%の生徒が肯定的に回答しており、音楽の諸要素をとらえて聴こうとする意識が高まってきたといえる（図 17）。しかし、音色やリズム、強弱などの簡単な要素についてはある程度聴き取れるようになってきてはいるが、いくつかの要素が関連しているテクスチャなどの複合的な要素については、更に理解を深めていく必要があると思われる。

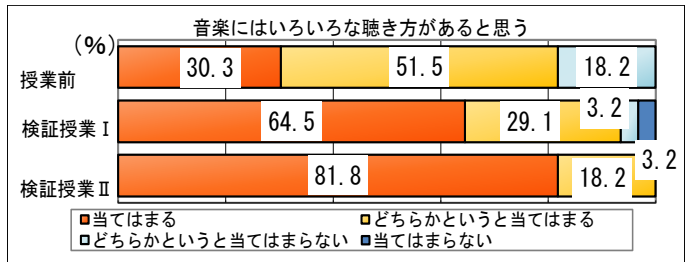


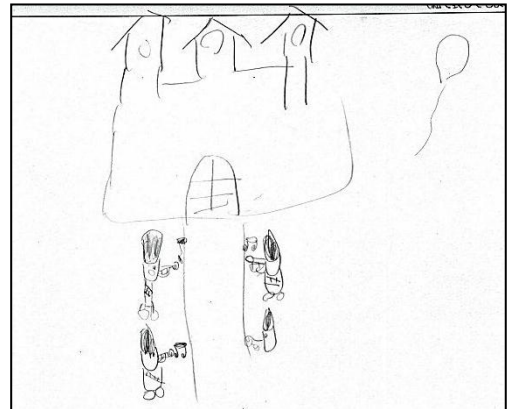
図 18 音楽の聴取について

さらに、検証授業を通して、生徒の音楽鑑賞についての意識が変化した（図 18）。これは、鑑賞における様々な視点を学習したことによるとと思われる。この意識の変化は深い聴取活動へとつながるものであると考える。

(2) 個人内の変容

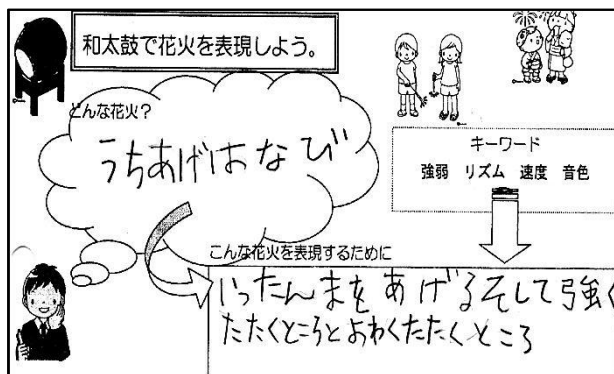
ア 男子生徒 A（感受重視の聴取の傾向にある生徒）

この生徒は、音楽の諸要素についての理解が十分でなく、実態調査における知覚に関する項目については正答率が 3 割以下であったが、感受に関する項目では、イメージを膨らませ、音楽に表されている情景を具体的に絵で示していた（資料 15）。このことから、感じ取ってはいるものの、それを的確に言葉で表すことが苦手なのではないかと推測された。

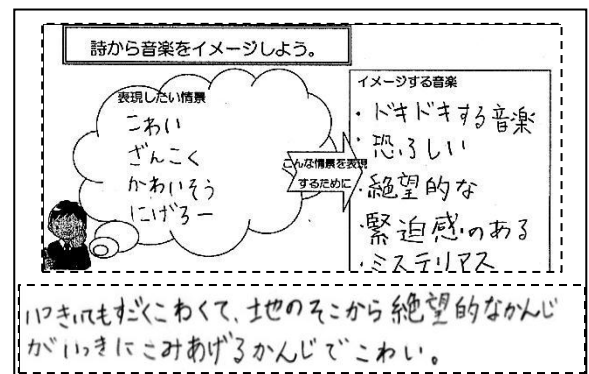


資料 15 実態調査：感受に関する項目

検証授業Ⅰでは、即興的表現を通して感覚的に音楽の諸要素を感じ取ることができ（資料 16）、検証授業Ⅱでは、「音楽鑑賞のすすめ」を活用しながらイメージを生き生きとした言葉で表現することができた（資料 17）。また、音楽劇をつくる活動では、「こんなにできると思わなかった」という感想を残しており、音楽をつくる達成感を味わうことができたものと思われる。



資料 16 検証授業Ⅰ第 1 時ワークシート



資料 17 検証授業Ⅱ第 1, 2 時ワークシート

イ 女子生徒 B（知覚重視の聴取の傾向にある生徒）

この生徒は、ピアノを習っているなど音楽経験が豊富な生徒である。「鑑賞」について、当初のアンケートでは、「聴くのは好きだけど、文に表すのは苦手」と回答していた。実態調査では、知覚に偏った聴取の傾向が見られていた（資料 18）が、音楽を知覚する力を生かして自分なりのイメー

同じ主題がずっと変わって何回も出てきた。全体的に明るい長調の曲だけど、ときどき短調の部分もあった。最後のコーダの部分は、いちばんにぎやかになった。

資料 18 実態調査：感受に関する記述

ジを深め、それを少しずつではあるが表現することができるようになった（資料 19）。

活動においては、当初戸惑う様子が見られたが、音楽劇をつくる活動ではグループの中心となり、イメージと合った響きを工夫して曲をつくっていた。

気付いたこと	感じたこと
最後が特に迫力があって強弱や調の変化がはげしい。軽調していた。魔王が言うときは、長調で、息子のときは、短調	最初と最後の強弱の違いが激しく、魔王がだんだん近づいてきて、息子の怖さが増していくのが分かった。

資料 19 検証授業Ⅱ第3時ワークシート

IV 研究のまとめ

1 今後の指導に向けて

今後、本研究を生かして実践を行っていくために、有機的・効果的に関連付けた題材を年間指導計画に位置付けようと考えた。表現と鑑賞を有機的・効果的に関連付けた題材の必要性についてはこれまで述べてきたが、年間指導計画においては、題材間の有機的・効果的関連も求められている。

今回の学習指導要領では、教科目標の中に「音楽文化についての理解を深め」ることが新たに規定された。音や音楽を知覚し、感受する力を高めることで、多様な音楽をとらえ、そのよさを感じ取ることができる。また、多様な音楽に触れることで、音や音楽を知覚し、感受する力を高めることができるともいえる。音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ることや、その音楽に込められた思いを想像したり、音楽が生まれた背景を理解したりすることによって、様々な音楽のよさを味わうことができるようになる。そうした学習を繰り返していくことで、多様な音楽がはぐくまれてきた多様な文化を理解することにもつながっていくと考える。

そこで、年間指導計画を作成するに当たっては、特に、音楽文化の理解を深めるという視点を重視し、先に述べた四つのカリキュラム類型のよさを生かして、音楽文化の理解をねらいとした題材を設定したり、系統性をもたせて（表 8）様々な文化を背景とする幅広い音楽を取り扱うなど、教材選択を工夫したりした。

また、「歌唱」、「器楽」、「創作」、「鑑賞」の四つの活動のバランスを考慮し、有機的・効果的に関連させながら、ねらいが達成されるように題材を構成し、幅広い活動を通して、生徒の興味・関心を引き出し、学習への意欲を喚起することができるように工夫した。

それぞれの題材は、題材の前後の学習のつながりを意識するとともに、文化祭や卒業式などの学校行事などに関連させて配置した。共通教材は、我が国の美しい自然や風土などを感じ取りやすいようにふさわしい時期に取り扱うように配置した。

さらに、発達の段階に応じて、音楽の構造や音楽文化の理解、表現の技能の習得がなされるように、〔共通事項〕を踏まえつつ、3年間の学習内容に系統性をもたせた（表 9）。

表 8 音楽文化の理解に向けた学習内容の系統性

第1学年	第2学年	第3学年
我が国の音楽 ■ ■ ■	歌舞伎 文楽 ■ ■ ■	能楽 雅楽
箏 尺八		
郷土の音楽 日本のお祭り	日本の民謡	日本音楽史
わらべうた ■ ■ ■		
アジアの諸民族の音楽 ■ ■ ■		世界の諸民族の音楽
	ポピュラー音楽	現代音楽
	オペラ ■ ■ ■	バレエ
		西洋音楽史
西洋音楽 ■ ■ ■		

表9 年間指導計画の例（第3学年）

学期	時数	題材名	題材のねらい	主な学習内容	〔共通事項〕	教材	活動のバランス			
							歌唱	器楽	創作	鑑賞
1学期	3	歌うよろこび 奏でる楽しみ	演奏の基本を確認しながら、 多様な音楽に触れ、演奏する 楽しさを味わわせる。	・情景を思い浮かべて歌う。 ・アルトリコーダーで演奏する。 ・旋律に合ったリズム伴奏を付けて演奏する。	音色 旋律 リズム 強弱 構成 形式	「花」 「花のロード」 「花のロード」	◎	◎	○	○
	5	声部のかかわり を感じて	対位的な楽曲を鑑賞したり 演奏したりする活動を通して、 声部のかかわりをとらえさせる。	・4声の響きを感じ取って聴く。 ・伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する。 ・曲の構成をとらえて鑑賞、演奏する。 ・4声の響きを味わいながら演奏する。 ・曲想を生かして表現の工夫をする。	季節に応じた教材 構成 形式 音色 旋律	「目覚めよと呼ぶ声あり」 「遠い日の歌」 「カノン」	◎	○	○	◎
	3	管弦楽の 響き	音楽の様々な要素の働きによっ て生み出される特質や雰囲気、理 解して聴き、そのよさや美しさを味 わわせる。	・オーケストラの多彩な音色を味わう。 ・背景となる歴史・文化を理解して鑑賞する。 ・管弦楽や室内楽の名曲を比較して味わう。	音色 旋律 強弱 リズム テクスチャ	「ボレロ」フラメンコ 「アランフェス協奏曲」 室内楽の名曲		○		◎
		現代音楽を 味わう	現代音楽の特徴や概念をその背 景となる文化や歴史と関連付け て聴くなどして、よさや美しさを味 わわせる。	・武満徹の作品を鑑賞し、現代音楽を味わう。 ・様々な楽曲を鑑賞し、現代音楽の概念を知る。 ・自分たちの「木片の音楽」をつくる。	音色 旋律 テクスチャ 構成	「ノヴェンバーステップス」 「木片の音楽」 その他の現代音楽		○	◎	◎
2学期		総合芸術を 味わう	能楽や雅楽、バレエなどを、 その背景となる文化や歴史と関 連付けて鑑賞し、よさや美しさを 味わわせる。	・能楽を鑑賞し、その特徴や歴史を知る。 ・謡曲「高砂」を歌う。 ・雅楽を鑑賞し、その特徴や歴史を知る。 ・バレエを鑑賞し、その特徴や歴史を知る。	音色 旋律 テクスチャ 構成	能楽「船弁慶」「高砂」 雅楽「陵王」「胡蝶」 バレエ「白鳥の湖」	○			◎
	6	声の魅力	曲にふさわしい発声、表現を 工夫させ、声の響きを味わわせ る。	・様々な合唱曲を鑑賞し、声の魅力を味わう。 ・伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。 ・声部の役割を生かして表現の工夫をする。 ・全体の響きを感じ取って合唱する。 ・楽曲の特質をとらえて歌う。 ・曲想を生かした表現の工夫をする。	旋律 音色 強弱 リズム テクスチャ	「大地讃頌」 「花の街」 「帰れソレントへ」 合唱の名曲 世界の諸民族の音楽	◎			◎
	3	思い出を歌に 込めて	言葉の特徴を生かし、全体のまと まりを工夫させながら詩にふさわし い旋律をつくらせる。	・中学校生活の思い出を振り返り歌詞を書く。 ・歌詞に合う旋律を考える。 ・つくった旋律を発表する。	旋律 リズム テクスチャ	「旅立ちの日に」 詩に旋律をつけよう！	○		◎	○

2 研究の成果

(1) 音楽の「知覚」と「感受」について

先行研究や文献などを基に、人が音楽を知覚・感受する過程を明確にすることができた。それを踏まえて、知覚と感受のかかわりを意識させるような指導の工夫を行い、生徒の「音や音楽を知覚し、感受する力」を高めることにつながった。

(2) 「創作」と「鑑賞」を有機的・効果的に関連付けた題材の開発について〔視点1〕

題材開発の流れを明確にし、様々な活動を関連させて取り入れたことで、いろいろな角度から音楽のおもしろさを味わわせることができ、音楽に対する興味・関心を高めさせることができた。

また、音や音楽を知覚し、感受する力を高める題材モデルとして、知覚モデルと感受モデルを考案した。それぞれのモデルを基に題材を構成したことによって、題材全体によりつながりをもたせることができ、一貫して題材のねらいに沿った指導を行うことができた。

(3) 音の意識化を図る指導法の工夫について〔視点2〕

授業展開における場の設定や鑑賞方法の工夫を行ったことで、音や音楽に主体的に向き合わせることができた。

さらに、「フラワーマップ」を開発し、表現の効果を感じ取らせる学習において用いたところ、音楽の諸要素を意識させることができ、また、特質や雰囲気、曲想とのかかわりをとらえさせることができた。

(4) イメージや思いをもたせ共有させる手だての工夫について〔視点3〕

自分のイメージや思いを言葉で表すための手だてとして、「音楽鑑賞のすすめ」を作成し、活用させたことで、生徒は「音楽鑑賞のすすめ」を参考にし、自分の思い浮かべたイメージや思いを表す言葉を見つけ、さらに自分なりの表現で書くことができた。

3 今後の課題

- (1) 音楽に対するイメージや思いなどを伝え合うために、音楽を形づくっている要素についての理解や音楽に関する用語や音楽を表す言葉などの語彙力を高める指導法を工夫する必要がある。
- (2) 音や音楽を知覚し、感受する力を更に高めるために、おのずと感性を働かせて表現することのできる舞踊や、形式にとらわれない自由な身体的表現などの身体的表現活動を効果的に取り入れた指導法を工夫する必要がある。
- (3) 自然音や環境音、我が国や郷土の伝統音楽や生活に根ざした音楽などを積極的に取り入れ、音楽文化についての理解など、様々な視点から有機的・効果的な関連を図った題材の開発に取り組む必要がある。

＜引用文献＞

- | | | | |
|----------|-------------------|-------------|-------|
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 | 平成 20 年 9 月 | |
| ○ 西園芳信 著 | 『音楽科カリキュラムの研究』 | 1993 年 6 月 | 音楽之友社 |

＜参考文献＞

- | | | | |
|-----------------------------|---|-------------|-----------------|
| ○ 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 | 平成 20 年 8 月 | |
| ○ 鹿児島県
総合教育センター | 『指導資料 中学校音楽科における言語活動の充実—鑑賞における指導の工夫を通して—』 | 平成 21 年 5 月 | |
| ○ 鹿児島県
総合教育センター | 『平成 21 年度長期研修報告書 思いや意図をもって表現する音楽科学習指導の在り方—イメージと「音楽を形づくっている要素」を関連付ける学習活動を通して—』 | 平成 22 年 3 月 | |
| ○ 岐阜大学教育学部
附属小学校 | 『平成 21 年度研究報告 聴く力をつけ、表現の高まりがわかる子の育成～指導内容を明確にした題材指導計画と授業展開の提案～』 | 平成 21 年 6 月 | |
| ○ 佐藤大二著 | 『修士論文 情動を喚起する認知的聴取と知覚的聴取の要因のちがいについて—中学生の音楽に対する印象を中心として—』 | 1995 年 3 月 | 兵庫教育大学
大 学 院 |
| ○ 西園芳信・伊野義博
編著 | 『平成 20 年改訂中学校教育課程講座 音楽』 | 2008 年 11 月 | ぎょうせい |
| ○ リーマー 著／
丸山忠璋 訳 | 『音楽教育の哲学』 | 1987 年 3 月 | 音楽之友社 |
| ○ マーセル 著／
美田節子 訳 | 『音楽教育と人間形成』 | 1967 年 12 月 | 音楽之友社 |
| ○ 波多野誼余夫 編 | 『音楽と認知』 | 1987 年 7 月 | 東京大学出版 |
| ○ 梅本堯夫 編 | 『音楽心理学の研究』 | 1996 年 1 月 | ナカニシヤ出版 |
| ○ アイエロ 編／
大串健吾 監訳 | 『音楽の認知心理学』 | 1998 年 3 月 | 誠 信 書 房 |
| ○ ジェスリン・スロボダ
編／大串健吾 他 監訳 | 『音楽と感情の心理学』 | 2008 年 10 月 | 誠 信 書 房 |
| ○ 松本恒敏・山本文茂
著 | 『創造的音楽学習の試み』 | 1985 年 6 月 | 音楽之友社 |

長期研修者　〔 坂本　多恵 〕

担 当 所 員　〔 内　真奈美 〕

【研究の概要】

本研究は、「音や音楽を知覚し、感受する力」を高めていくための音楽科学習指導の在り方について研究したものである。

まず、聴取の過程を分析することで、音や音楽を知覚し、感受する過程を明確にした。そして、この過程を踏まえて「創作」と「鑑賞」の活動を有機的・効果的に関連付けた題材を開発し、音の意識化を図る指導法の工夫や、イメージや思いを共有させる手だての工夫を行った。

その結果、音や音楽の要素を意識的にとらえようとする姿が見られるようになり、音楽の諸要素や要素同士のかかわりをとらえて、音楽の特質や雰囲気を感じ取り、さらに、自分なりのイメージや思いをもって主体的に音楽活動に取り組むことができるようになってきた。

【担当者の所見】

音楽科の授業は、音楽室で鳴り響く音や音楽に対して生徒をどう向き合わせるか、教師の手だてが求められる。

本研究は、学習指導要領の改訂に当たって示された音楽科の改善の基本方針及び当該学校の音楽科における課題を踏まえ、創作と鑑賞の活動を有機的・効果的に関連付けた題材における指導を通して、音や音楽を知覚し、感受する力を高める学習指導の在り方を探究したものである。音の意識化を図る指導法や、イメージや思いを共有させる手だてを工夫したことで、創作と鑑賞それぞれの活動で身に付けた力を駆使し、生き生きと活動に臨む生徒の姿が見られたことは研究の大きな成果である。検証授業後、「今日、また一つ音楽の聴き方を学んだ気がする。」と生徒が述べていることは、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断できた満足感の表れとも言えよう。また、本研究から編み出された「フラワーマップ」や「音楽鑑賞のすすめ」など、今後、他の学校でも汎用されるものと思われる。

多くの文献等に接し、緻密な研究を重ね、飽くなき追求の手を緩めなかった研修者の姿勢は範となるものである。今後、自身の芸術、音楽への志を高くもち、本研究を基に、生徒が音楽を愛好する心情をより一層はぐくむような授業の創造に邁進していただきたい。